

○金井部会長

皆さん、こんばんは。第4回目の第1検討部会を開会いたします。

本日の主たるテーマは、永瀬前市長のインタビューということでございます。皆様のお手元に本日の永瀬前市長にお話をいただきたい内容として、紙が配られていますが、これは私のほうから永瀬前市長をお呼びするにあたって、どういう主旨でお話いただきたいかということを簡単に書いたものでございます。簡単に言うと自治基本条例を定めるにあたって、第1部会では歴史といいますか、これまでのあり方を振り返りながらアプローチして、その上で市と市民の関係、行政経営のありかた、議会のあり方というような自治基本条例の中身に到達したいということで、概ね戦後の川口市政について、大野市政について、そして中心となる永瀬市政について、今後は課題としてあるいは期待されているのか、というお話をざっくりばらんにいただければと思っています。

本日はせっかくの貴重なお話ですので、通常よりも詳細な議事録を、録音した上で作成するというので、永瀬前市長さんからもご了承いただいておりますが、皆さんもあとで発言のチェック等、お手間かけるかと思いますが、よろしくお願いいたします。

本日お呼びしている永瀬前市長は、おそらく市民の方には説明するまでもないとは思いますが、前々市長であります大野市長のもとで秘書課職員として仕えておりまして、その後、昭和42年に市議会議員に出馬して当選、市議一期を経て、昭和46年に県会の方に移りました。その後、県議3期目の途中に大野市長の辞任に伴い、昭和56年5月に市長選に出馬し当選して、以来4期16年川口市政における市長の職を担われたということで、平成9年の5月に勇退されたという経歴でございます。現在は文化活動を中心に、大変お元気に活躍されているということでありまして、最近で言えば、今年のアートギャラリーで開催された「二人のクロードル展」でいろいろとご活躍をされたということでございます。

私の前口上はこの辺にいたしまして、早速、前市長から一時間ほどご講演をいただきまして、その後一時間ほど皆様からの質疑をしていただければと思いますので、ぜひ積極的に、せっかくの機会ですから、ある意味で川口市政の生き字引でもある永瀬前市長にいろいろと伺って、今回の自治基本条例の制定に少しでも役に立てて知見を深めていければと思っていますのでよろしくお願いいたします。

それでは永瀬前市長、よろしくお願いいたします。

○永瀬前市長

皆さん、こんばんは。紹介されました永瀬でございます。

実は、私、まず、断っておかないといけないのですけれども、私自身、歴史家でないし、また、郷土史家でもないわけで、ただ、川口市の行政とか、あるいは川口市の地方自治に携わっていたということは、かなり長いものがありました。特に、金井先生がこの機会を計画するに当たりまして、わざわざ手紙がきまして、特に戦後の川口の全般的なものについて、どういうふうに見ているかということを中心として話してほしいということがあります。特に、自治、要するに市と市民との関係、あるいは行政経営のあり方とか、あるいはまた議会のあり方と、きょうは議員さんもお見えになっておりますので、これらについて、逐一お話をしていきたいというふうに思っております。

実は、戦後の川口ということの限定でございますが、戦後60年たちますけれども、それらの行政とか、自治を語る場合、やっぱりその前段にある川口の歴史の、少なくとも明治から、あるいは徳川の終わりごろから明治にかけて、さらに大正時代にどのようなことが川口で起こってきたかという概念的なものをある程度つかまないと、戦後の答えが出ないのではないかというふうに思います。ちょっとまどろっこしいかもしれませんが、しばらくの間、川口の戦後に至るまでの一つの経過ということをご説明させていただきたいと思います。

ご承知のとおり、川口では、徳川時代のおそらく初期から中期にかけて、鋳物が勃興いたしました。中には900年前からというようなものもあるようですが、私はそういうことはないと思います。大体、徳川時代に入りまして、鍋、釜、それから鉄瓶だとか、茶釜だとか、そういったものから始まったのが川口の鋳物でございました。

何で川口だけ、この一箇所だけ鋳物が勃興したかと申しますと、これはもう申すまでもなく、地の利でありまして、荒川の砂、それから、荒川から出る良質な粘土であります。それが鋳物を溶かしたときに型を込める、要するに粘土と砂を混ぜて焼き型というのですが、焼いた、そこへ湯を入れて製品をつくるところから始まります。その材料に非常に適していたということがあります。それから、徳川時代になってきますと、江戸がだんだん大きくなってきて、消費都市になってきます。江戸に対しては、いろいろ行き来が非常に便利でしたが、この荒川を使っの江戸との交流が非常に密接であったと聞いています。

それから、川口の中を見ますと、芝川というのがあります。芝川が南北に流れておりまして、その芝川の影響というのも非常にあります。舟の便がよろしいし、しかも川口と浦和との境には通船堀もあります。あの当時からするとすごい技術力の運河で、さらにその上の方までさかのぼれたという、そういう利点がありました。そういった中で、鋳物が興る原因がつけられていったのです。

また、埼玉県は武蔵の国で、大体農地が多かったのですが、川口は、非常に水位の低いところで、ちょっと掘ると水が噴水のように出てきました。そういうようなところですから、田んぼとしてはあんまり適していません。ですから、鋳物をやる人というのは、百姓を片手間に、そして、鋳物にだんだん入り込んでいったのではないかということが、川口の鋳物の勃興につながってくると思います。

しかも、明治になりますと、今度は急に鋳物の製法も変わってきました。要するに、炭で鉄を一緒になって溶かしていたのが、やがてはコークスになったり、そして、さらに進んでくると電気炉になったりということで、それをどんどん川口の人たちは、科学的にやってきたということと、それから、焼き型というのも、それだけではだめなので、砂にいろいろ薬品を入れて、生型という大量生産できる鋳物を真剣になってつくり上げたのです。それで、徳川時代の終わりごろは、鍋、釜か、せいぜい梵鐘とか、それから天水桶でしたが、そういうものからさらに一歩進んで、ちょうど幕末の日本の国が国防の関係でおかしくなったときに、勝海舟や、高島秋帆だとか、そういう人たちが幕府の役人として来て、そして、川口でどんどん注文していったのです。それで一躍川口が有名になりました。そして、明治になると、さらに科学技術が進歩して、船舶エンジンとか、それから、大きなものに切りかえていったわけです。川口の鋳物は、今、南部の鉄瓶とか、あるいは高岡の方にあります、いろんな芸術鋳物がありますが、ああいうきめ細かいものよりも、むしろ大型で1トン幾らだというようなつくり方をした鋳物工場が非常に多くなってきたということです。

そういった中で、工場の雇用関係はというと、徳川時代から大正時代にかけてまで、ずっと徒弟制度というのがありました。徒弟制度というのは御承知のとおり、10歳ぐらいの子供を、鋳物の親方のところへ連れて行き、当時1両といってるのですが、それを徒弟として入れて10年ぐらい一生懸命修行をさせるのです。そして、ようやく20歳ぐらいになった頃、つまり10年たつと、今度はさらに1年ぐらいお礼奉公だといって、お礼

奉公をさせて、お礼奉公が終わると、鋳物屋の親方の片隅に買湯という制度がありまして、鉄の湯が出るのですが、それを「おまえのそのスペースにそれを貸してやるから、それを使いなさいよ。」と言った、それが買湯制度です。そして、買湯でうまくやっていったのが、ようやく一人前の経営者に上がっていくということなんです。

そういう伝統的なものの中で、江戸の下町の職人的な職人氣質というのがだんだん育っていったのではないかということです。

それで、その後、明治に入り、大正、昭和にかけて、今度は戦争がどんどん起こってきて、鋳物は鉄ですから、当然いろんな軍備拡大の中で利用されてきたわけですが、川口のまちは、そういった中でだんだんほかの近隣の農村とは異ってきたようです。本当にその鋳物として実力が発揮されて知られるようになるのは、大正に入ってからではないかと私は思っています。

川口も、川口町に限定して言いますと、鋳物屋さんがだんだん活気がついて大きくなって、仕事もたくさんあって、技術的にも開発されると、鋳物屋さんの勢力がだんだん強くなります。そうすると、やっぱり町も町議会に参画する町会議員も鋳物屋の人が非常に多くなります。鋳物屋さんばかりがだんだん羽ぶりをきかせてくるのです。ところが、昔からの土着の営業地主、要するに地主階級の人たちとは、どうも肌が合わないのです。片方は一生懸命汗水流しているのに、片方はだんだん、土地が開けて地価が上がる。一方、鋳物屋さんも、鋳物というものはだんだん規模が大きくなってくると、敷地面積も大きくなるのです。そうすると、昔からの地主のところへ行って「土地を貸してくれ。」というのですが、どうも地主の旦那が威張ってなかなか貸してくれないのです。そういうような、恨み辛みがありまして、絶えず、町議会ではさかいがあるという、鋳物屋派か、営業地主派か、というような分かれ方をしていたのです。

それが、具体的に起こった例としては、川口は鋳物屋さんが多いから、金山神社という鋳物屋さんの神社がありました。その金山神社は、明治39年に国からおふれが出まして、一つの町に、神社が色々あってはけないと、統合せよという指令が出たのです。それは、金山神社というのは鋳物屋の旦那方とか職人が信仰する、かなり派手やかなものがありましたが、氷川神社と合体しろというものでした。ところが、鋳物さんは羽ぶりがいいですから、「冗談じゃない、そんな鎮守だかなんだか知らないけど、氷川神社なんかとは合体できないよ。」ということで、そういうことが記録

にも残っておりまして、当時の明治40年代の町長さんが、そのあおりを受けて辞めたという例もあります。

それから、大正に入りまして、大正の終わりごろ、その当時の国の方で燃料研究所を、今の川口駅前につくろうというのだけれども、地主側は、「俺たちは反対だ。」と言うのです。「そんなものは鋳物屋の言うなりになっちゃう。」とか、鋳物屋側は、「これから科学がどんどん発達するのだから、燃料の研究をしなくてはいけない。」とか、かなりそういった、悶着があったのです。しかし、燃料研究所が鋳物屋さんの努力でできました。ただ、考えてみますと、燃料研究所が数十年前に筑波学園都市に移りましたけれども、何か象牙の塔のようなもので、あんまり地元の鋳物機械工業への貢献は、大したことがなかったのではないかとということでありました。

そういうふうなことで、町の政治の中では絶えずそういう争いがあったということです。

それと、だんだん時間がたってきますと、大正の終わりごろに、徒弟制度に替わり、今度は労働者の立場から、東京で労働運動が起こります。友愛会ですが、そういう人たちが川口にも流れてくるわけです。それで、労働者の権利を守ってくれというようなことなのですが、川口は徒弟制度のせいで、鋳物屋が本当に前近代的な発想なのです。例えば、大正の終わってから昭和8年ごろまでにかけてですが、昭和の初年には、労働運動が起こります。一番ひどい時などは、昭和の一番不景気な頃ですが、昭和4年には、ニューヨーク株式市場大暴落で世界大恐慌から日本の不況に拍車がかかり、その2年後の昭和6年ごろには、各工場に、労働組合が活躍するのですが、組合もまだ完全に成長していないのです。それから、鋳物屋の親方も安全対策や、労働者に対する理解がないものですから、普通の交渉の場につくのではなくて、怒鳴り合いだということです。そういうことがありまして、しかも、警察官が経営者側ですから、サーベルを抜いてなぐったりしたとそういうようなことがありました。当時、戦後に総理大臣をやった片山 哲だとか、それから、本市で後に代議士をやった井堀さんとか、そういった人たちが若いころで、相当活動をしてまして、昭和6年あたりには、舟戸河原でメーデーをやったりすると、警官ががちゃがちゃサーベルを吊り下げてきて、「弁士中止、検束。」と言うのです。このように、本当に前近代的なことがあったのです。

それが、私は逆に考えると、昭和初期に果てしない争議があったので、

戦後いろいろ労働組合ができてたりして、これは川口はたいへんだなと思っていたら、いろいろ争議はあったのですが、そんなに全国に波及するような問題は、起きないで済んだということも一面ではあったわけです。まあ、反面教師とでもいうのでしょうか。

昭和の初期になると、地主と鋳物屋の争いから、国の方でも政友会とか民政党とか、あるいは社会大衆党とか、そういった政党が出来てきましたから、今度はそういった政党の国での争いが小さな町の町議会あたりでも広がってきたということがあったのですね。

そういったことで、川口町も景気がよくなったり悪くなったりするのですが、日々に鋳物の力が強くなっていきました。結局は、この町をもう少し何とかしなくてはということで、昭和8年ごろから、町村合併しようということで、川口町を中心にそのような動きがありました。川口町の西の方に横曽根村というのがありましたが、横曽根村というのは、遠山暉男という村長さんが、なかなか歯切れのいい村長さんで、その方は川口をうまく利用して合併すれば、やがて横曽根村にも、北川口駅をつくろうというそういう野心もありました。だから、合併促進派だったんです。

ところが、川口町の北側には、青木村というのがありまして、青木村は、上青木、下青木、前川という字(あざ)がありました。ところが、前川というところは、どういうわけか、民政党の政治勢力が強かったのです。川口町は政友会というのがあるって、その勢いが強いから、合併なんかすると、市議会でもできたとき、うるさいのではないかということで、なかなか合併には積極的ではなかったのです。川口町の東には、南平柳村というがありました。そこは、お味噌屋さんが盛んでして、相当金持ちの人たちが味噌を製造して裕福であったので、合併時には、南平柳村は、村の借金がなかったのです。それで、「川口なんかには合併する必要はないじゃないか。」というのです。「俺たちの村は裕福だ。」と、「場合によっては、俺たちは何も川口なんかと合併しないで、東京府もあるじゃないか。」というんです。「東京府とやるんだ。」と鼻息が荒かったのです。

ところが、昭和6年から昭和8年にかけて、永瀬庄吉元町長や矢崎健二町長が奔走し、2年間でまとめて、それで、昭和8年の4月1日に川口市ができたわけです。そのときは4万人そこそこの市でしたけれども、川越に続いて熊谷、それから、川口市と、埼玉県では3番目に市制を施行しました。それからいろいろありましたが、その後、昭和15年になりますと戦争が激しくなりまして、そうすると、川口をもっと広げようということで、

これは、国も肝いりで、さらに川口を広げて、鳩ヶ谷町を吸収しようということになり、それから、芝村を吸収し、神根村、それから、新郷村と、1町3村と昭和15年に合併したわけです。

ところが、その後、戦後に飛びますが、昭和25年に鳩ヶ谷町は川口市と合併したけど、さっぱりいいことがないじゃないかということで、最後には、鋳物屋の羽ぶりがいいものですから、結局、鳩ヶ谷地区から市議員も出せなくなったのです。その当時、晝間 仲右衛門さんという青年が筵ろ旗立てて、川口と分離しようじゃないかということで、市町村の分離というのは歴史上ないですね。だけど、昭和25年に分離運動が盛んになって、それで結局、鳩ヶ谷町は戻ったのです。それで、川口はその後、戸塚とか安行とも合併して大きくなったので、鳩ヶ谷は真ん中に取り残されました。やがて、鳩ヶ谷も市制をひくようになりました。最近でも平成の合併で一緒になるんだ、ならないんだといって、結局だめになったのですから、そういう歴史の中に、まだまだいろんなことがあるのです。

さて、いよいよ戦後に入っていきたいと思います。戦争に負けたのは1945年、昭和20年ですが、これはもう日本がばかな戦争をやってしまって、これはもう川口のみならず、全部が大きく変わったわけです。それで、私はちょうどそのとき中学校2年生でしたが、子供心に見て、学校に行くと、「教科書を出せ。」と言われて、そして、墨をすって、とにかく歴史だとか国語の本をほとんど見えないくらい墨で消されたのを覚えています。

それから、ちょっと時代が戻りますが、川口にも戦災はあったのです。昭和17年のドリトル爆撃機にディーゼルが空襲されて死者も多く出ています。昭和20年に近づくにつれて空襲も多くなり、爆弾も落ちました。でも、これは川口の市域から見ると少ないものですから、戦災の影響がないと申してもよろしんじゃないかなと思っています。

それから、川口にも食糧難はありました。川口の市街地の人たちの多くは、配給じゃだめだから買出しといって、よく神根とか新郷とか、戸塚の方へリュックサックをしょって買い物に行くんです。それから、市としても、非常に財政が逼迫していました。それで、ドッジという経済学者が来たり、シャープ勧告案というものがありませんでした。それで、シャープ勧告案などに基づいて、今まで地租といていたものが固定資産税になって、その当時、一挙に固定資産税が3倍ぐらいに上がったと記憶しております。とにかく財政を改革するということは、できるだけ特定財源、つまり、市の財源をふやそうということがシャープ勧告案に盛り込まれていたのです。

当時、川口は北の方にいくと、農地がありましたけれども、農地開放がありまして、農地が開放されました。それから、アメリカのGHQが来まして、各都道府県にGHQの民政部というのができまして、埼玉県庁を経由して市や町や村の、いろんなところへ指令を出すのです。憲法なんていうのも、結局、向こうで早くつくりかえなさいというのです。それから6・3制などは、アメリカの一部の州でやっていたので、6・3制をすぐ実行すべしということで、市の行政では、それに沿ってやっていかななくてはいけなかったわけです。そういった中で、結局、私どもは、ちょうど食糧難の頃でしたけれども、戦争は終わったと、もう空襲はないと、もう俺たちは死ぬことはないんだというので、大人はどうか知りませんが、我々中学から高校ぐらいの人たちは、何かいいことが、今は本当にがつつしてサツマイモ食べながらだけれども、何かいいことがあるんじゃないかというような、子供ですから、希望を持って明るかったのです。

そういう中で私は、ちょうど中学も高校も浦和の学校でしたから、浦和へ通っていましたが、そのまちそのまちに特色があったのです。大宮へ行きますと、大宮というのは、明治から鉄道の町として、いろいろと鉄道関係の職員の住宅だとか官舎があってですね、いつも何か鉄道という感じの、鉄道を中心とした鉄道の町でした。それから、浦和というのは県庁所在地で、いろいろなお役人だとかが住んでいて、何となく川口の職人気質とは違うものがあったわけです。それで、川口はもうさっきから申しましたとおり、鋳物の町として、川口駅でその当時降りますと、ぷんと鉄のさびの匂いがしたりだとか、それから、町を歩くと、粉塵が飛び交い、大きなガラの音がしたりだとか、いかにも鋳物屋の町でした。夜、初めて川口駅に降りた人は、川口は火事じゃないかというくらい「夜吹」で、溶鉱炉から火が上がるのが見えたのです。

もちろん言葉は荒いわけです。そして、ぞんざいです。川口には、いろいろと鋳物言葉というのがあるのです。クレーンを上げるときは「マロ」、下に行くときは「アメ」と言ったり、それから、鋳物の失敗作というのが、「ガンバラ」とか、そういう鋳物言葉というのが、ほかの町の人にはわからない、すごく特徴的なものがありました。そういった町が川口の特徴というか、何となくすごい荒っぽい、そういう情緒が欠けているんじゃないかと思うようなものがあったわけです。

私も、浦和へ行くと、「君の言葉は随分ぞんざいだ。」と言われました。生まれたときから私は、川口ですから、「おめえおめえ。」なんて言うの

です。「おめえって何だよ、君はおめえおめえって僕のこと言うけど、ばかにしているのか。」って、「そうじゃねえよ、おめえは何言ってるんだよ。」って、そんなようなことで同じ中学、高校生でもそういう差異がありました。

だから、まちの特徴というのは、今ではみんな、うちへ帰るとパパだとかお父さんだとか、格好いいことを言っていますが、昔は大体うちへ帰るとお母さんのことは、「かあや」ですよ。それから、親父、お父さんのことは「とんとん」だとか、「とうや」だとか、そういう呼び方でした。それを浦和の方の人たちは、冷ややかに見て、なんか川口は教養がないんだなというような顔をするのです。

戦後のあの大変なときに、浦和は高台の静かなお役人さんのまちで、チェルニーだとか、ソナチネかなんかのピアノの練習曲が、聞こえてくるのです。川口はそういうものは聞こえないで、がらがらがらがらって、いうのですから。そういう差異もあって、市民性というのは随分違っていたのではないかなというふうに思っております。

今度は、政治面で少し申し上げますと、新憲法ができたのは昭和21年5月3日ですが、その前の4月10日に衆議院が1回選挙をやっています。そのときは、まだ新憲法によるものではないのです。要するにマッカーサー司令部の指令で、選挙をやれというので、新選挙法ができ、そのときの記録を書きとめてきたのですが、衆議院の定員が466名でそのうち、初めての婦人参政権で婦人議員の数が39人、その当時としてはええっというくらい出てますね、みんなもんぺ姿です。そして、その当時は自民党ではなくて自由党というのがありまして、自由党が141人、進歩党が94人、社会党が93人、それから、協同党、国民協同党とも言ってましたが、のちの総理大臣の三木武夫さんの党ですが、これが14名、それから、共産党が5名と、そういう按配で出てきました。それで、なんと定員466名に対して、2,770人が立候補したというのです。6倍です。ですから、みんな戦争が終わって、よしこれからは私たちがやってやろうという意気込みで、国会がそうだったのです。その勢いでそのとき初めて選挙権が25歳から20歳に、それから、女性が参政権を得たということで、女性がとにかくあふれていたのです。ですから、女性がしっかりしてました。そういうことで、女性が入ってきたのです。

その当時、川口の人口がちょうど昭和21年に10万人を突破しました。そして、昭和21年5月3日に新憲法が発表されました。これに基づいて昭

和22年に、6つの選挙があったのです。昭和22年4月5日には、大泉寛三さんが市長に当選したのです。

それから、埼玉県では西村実造という人がおりまして、西村さんという人は、官選の知事ですが、新たに立候補して、あの方は外国の商社などと非常に通通だったのですが、当選しました。それで、進駐軍の埼玉司令部が浦和にあって、ライアンなどといった中佐ぐらいの人が県の民政部の司令官で、それが非常になめっこかったのです。ところが、残念ながら収賄事件で逮捕されてしまうのです。それで、1年か2年で鹹になりました。その後、大沢雄一という人が知事に出ます。

それから、参議院では、昭和22年4月20日に選挙がありまして、自由党から小林英三さんが当選しています。それから、衆議院は新憲法による選挙で、昭和22年4月25日で民主党から田島房邦さん、これはお酒屋さんですが、その方が当選しています。それで、そのときは、最初、新憲法による解散で、そのとき衆議院では社会党は143票、それから、自由党が131票、それで、民主党が126票で、それで、結局、社会党が政権をとるのです。そして、片山 哲さんが総理大臣になって、それで、片山さん自身も実際にびっくりしたわけです。この人は川口のストライキのときに、労働組合の闘士としてきた人ですから、俺が総理大臣になるのかよということで、大変でした。そのバックにはGHQのマッカーサーの目が光っていましたから、マッカーサー司令部に押さえられて、ある面では保護されて、そして、その後、吉田茂さんとかがありました。大体占領下ですから、マッカーサーが実に巧妙に日本を操っていたということが言えるわけです。

川口市でも、それと同時に、昭和22年4月30日に県会議員選挙がありました。県会議員はその当時、佐山耕三という人が民主党から出て、高橋八郎さんという人が自民党から出て、江部賢一さんという人が社会党から出て、各党がそれぞれ当選してよかったなということでした。

さて、6つ目の選挙の最後が、市会議員の選挙で4月30日にありまして、そのとき、市会議員の定数が36でした。それで、また、これがたくさん出ました。つまらない親父連が出たのですが、こっちは高校生ですよ、あんな親父が、受かりっこないだろうということ、たしか10票とか15票を取ってました。大体2〜300票とると高位当選ですね。それで、その分布を見ますと、鋳物屋さんがその中に15人いました。それから、農業が5人、機械業が3人で、あとは幼稚園の先生だとか、自営業だとか会社員だとかがでました。その中で、初めて女性の議員が、池田美代子さんという幼稚

園の先生が女性としては初めての議員として当選しました。

私は、今、図書館へしょっちゅう行っておりまして、図書館に半日ぐらいいるのですが、こんなにももしろいものはないですね、それは、昭和22年から現在までの市議会の議事録なんです。その中の半分ぐらい私も関係しておりますけど、まだ、関係していない子供時代の頃の議事録を見ると、この議事録が今みたいに形式ばったのではなくて、もうほとんど町内会の総会と同じく、質問がある人は手を挙げて、と言われてそうすると、大野元美さんなんて張り切っていました。大野さんは当時、革新系無所属ですが、それで、大泉市長にがんがん質問して、大泉さんが立往生してしまうくらいです。それも、一問一答のようなもので、今度図書館に行ってみてごらんない、そういうような、実に戦後の本当に自由奔放さがうかがわれる政治だったのです。

ただ、本当に大変でしたのは、食糧難でした。それと、何も無いのに、いろいろなことをやらなくてはならない。学校だって、早速6・3制を適用しましたけれども、要するに、大きな教室に6〜70人入れたり、それから、早番と遅番と入れかえて、二部学級をやったり。それから、青空教室といって、「今日は体操やろう。」と先生が言うと、私、舟戸小学校ができて参観に行きましたが、先生と外へ行って、体裁よく言うと外で授業やったわけです。ただ、雨のときは困ってしまいます。そういうような、その当時の先生もみんな非常に努力して、それを何とか全うしていこうというあらわれがあったわけです。

それで、ちょうど、昭和20年から30年までの、戦後10年というのは、食糧難とか、いろいろと財政も逼迫して、福祉なんて言ってますが、貧しい人は本当に貧しいわけです。それから、多少の金持ちは、今度は財産税だとか、農地開放だとか、あるいは富裕税だとかぼんぼんとられるわけです。ところがその当時の貧しい人は、貧困の原因がたくさん子供がいて、そして、旦那の収入が少ないことにありました。それで女性の職業があまり選べないから、せいぜい内職ですよ。でも内職では喰えません。しょうがないから、多子家族という原因で生活保護の申請に来ます。

それから、その次に貧乏の原因だったのは、これは今と同じですが、年寄りでだれも身寄りがいないことです。ところが、あの当時は明治の気骨のあるお年寄りだから、「養老院入りませんか。」と言うと、「あんな養老院なんかへ俺は行って死ねるか。」と言って1人で頑張ったのです。それで、その次の貧乏の原因は、疾病です、病気ですね。ところが、疾病は

今と違いまして、結核がもうダントツでした。私もケースワーカーを昭和30年ごろにやってましたが、生活保護者のところへ行くと、「どうぞおあがり下さい。」と言われるのですが、あがりますと、子供も親父もみんなごほんごほん咳してるのです。うつっちゃいけないなと思って、すごく心配しました。そうかと言って逃げるわけにいかないし、じゃあ、しょうがないと、うちに帰ってから、うがいしましたけれども、結核による貧困ですね。

そういうことで、生活保護者を訪問する時、旦那さんには、「あなたの場合は大変だけれども、収入が少ないんだから。」と、今は、産めよ増やせよと子どもがどんどんできるように、いろいろなことをやっていますが、その頃は、「少しは夜は加減して、サンガー夫人の本でも読んでください。」などと言っておりました。産児制限の解説も私はやったことがあります。

そういう時代のことから、その当時は、要するに道路の舗装など全然だめで、昭和30年の頃の中央道路ですが、今、中央道路といったら、メイン道路ですが、あれだって、市役所から出てずっと歩いていくと、上青木あたりで、ごろんごろんと砂利道になるのです。私は、そのころ自転車で夜は映画を見せるために、お寺に人を集めておいて、米国少女俳優マーガレット・オブライエンとか美空ひばりの子供の頃の映画、ナトコ映画というのを見せて歩いたのですが、もう砂利道で青木を過ぎて、ちょうど今の青信あたりから先に行くと、もうどうしようもなく、目的地の前川観音までほとんどがたがた道でした。

それと、水道が川口に初めて敷かれたのが、昭和27年でしたが、そこから水道が始まりました。川口は、水道事業が早かったのですが、それでも物資がない時代ですから、ようやく始まったというわけです。

それから、警察が国警と市警の2つに分かれておりまして、国警というのは国家警察で市警というのは市長が警察の一番上になるのですが、市警がありました。市警は、やがては、昭和30年ごろ県警に戻りました。それで、こういうことがあったのです。昭和23年からの市警制度では、市長が市警の隊長ですが、その当時、田中徳兵衛という市長さんが、現職の市長だったのですが、選挙のときに違反をやったのです。田中市長の運動員が、田中さんの家が味噌屋だからといって、みんなに味噌配ったわけです。それが全部刑事に挙げられて、それで、味噌を配ったから、味噌もくそも一緒になっちゃったんですが、その当時は市警なのに、やっぱり警察

というのは大したものですよ。現職の市長であっても、告示になったら運動員がみんな数珠つなぎに警察に捕まりました。もちろん田中さんは落ちて、それで、高石幸三郎さんが、昔、市長やってましたけど、戦後また出るというんで、高石幸三郎さんが当選された。それは昭和28年ですけども、そういう時代がありました。

それから、西川口駅が昭和29年9月に開設しました。あのころ西川口駅の上から眺めると、青木方面にかけては、まだまだ一面に田んぼにつぐ田んぼでした。閑静でした川口は。それで、鋳物屋が中央とか元郷方面にちょろちょろとあって、それで、そういうのどかな、まことに今昔の感に堪えません。

さて、昭和29年には、それまでオートレースが民営でしたが、民間がやっても儲からないのです。それで、やむを得ず、市がオートレースを引き受けたのです。その後、オートレースは、一日当り1,200万円売上げがあると大入り袋が出たこともありました。そういう時代があったのです。それで、これは相当長い行路をたどってきて、今はまた大したことがなくなりましたが、黄金の時代がありました。

それから、ひと頃は、教育委員さんは、戦後間もなくは公選だったのです。選挙でした。それが、やがて、昭和30年代の始まりに、任命制になりました。昔は予算権も教育委員が持っていました。ですから、とにかくマッカーサー司令部では、教育は行政と合わせてはいけないというので、それで、独立権を非常に尊重したのです。これが、今、もとに戻ったような形になっておりますが、そういうことです。

それで、次に、金井先生の御質問の中に、大野市長について、その成果は、と書いてあるのですが、昭和31年になりますと、経済企画庁の経済白書に「もはや戦後ではない」と、10年たったのだから、もやは戦後ではないということでした。その翌年の32年に大野さんが当選したわけです。その前の10年間には大泉さんとか、田中徳兵衛さんとか、高石さんが市長をやってましたが、結局、大野さんのころになってから、世の中が非常によくなってきました。大野さんも非常にやり手の人ですし、日本も経済成長にあわせて、どんどん走っていた時期です。それからまもなく昭和39年には東海道新幹線ができたり、それから、オリンピック大会が東京で行われたということで大分変わってくるわけです。

ただ、大野さんが市長になった翌年の昭和33年に、市役所の分室が火事になってしまうのですが、これは大変なことだったのです。その当時の

書類で、教育関係だとか、土木関係の書類が随分なくなりました。それで、その後いろいろ議会で何かあると、ここにいる市議の金子さんが質問すると、「あの書類は残念ながら、あのとき燃えてしまいました。」といってしょっちゅう逃げられたのです。そういうことはありましたよね。そうしたら、輪をかけてその同じ年の昭和33年9月には、例の狩野川台風がありました。狩野川台風というのは、もうとにかく川口のほとんど、神根の高台の方は別として全市が水びたしになって、特に一番低い川口郵便局とか、駅前では、道路を歩いてても、首のあたりまで水がきて、我々も背伸びして歩いていました。私はそのときは市役所の職員でしたから、3日3晩、もう着たままで、ほとんど市役所も水びたしです、じゃぶじゃぶです。それで、そこヘイカダでみんなが入ってくるのんです。それで、「飯はどうした、パンでもいいから食べさせろ。」とか、「行政は何やってるんだ。」とか、もうけんまくの荒いこと。

それで、私は、そのころ市長秘書で、市長はあちこち飛び回っているから、私が留守番していると、「この餓鬼の頭をぶつけて俺も死んでやると、市は何やっているんだ。」と、もうけんまくの恐ろしいこと、そうなるわけです、だんだんと3日も4日も食べないと。水が引けない、それがずっと続きまして、それをきっかけに、もう何としてでも新芝川の改修をやらなくてはならないと、それで、その改修が、国の認定する激特事業として、かなりピッチが上がって、これは割合に早くいったのです。それで、とにかく遊水池がだんだん少なくなりつつありましたから、ポンプアップをしょっちゅうしてということの芝川改修というものが一つの行政の主目的だったのです。その頃になりますと、昭和40年代の初めには、武蔵野線を引こうじゃないかというので、武蔵野線期成同盟ができて、この近隣の草加とか、八潮とか、それで、川口も早速それにのって、先頭になって、最初は、「あそこへ電車なんかいらん。」、「いや荷物電車なんだから。」と言っていましたが、ところが、荷物電車というのは言い訳でして、実際に開通しなくてはならない、そういったことにもいろいろあったのです。

ただ、その当時、非常に貧しいけれども、いろいろな意気に燃えていたというのは、川口はまだ、その当時の平均寿命が50歳出たか出ないかでしょう、まだ、今と全然違うのです。今はもう女の人々の平均寿命は80幾つでしょう。それに比べると、まだ若いし、そして、活動する人がみんな若い人たちで活動していたのです。だから、いろいろなことがあったけれ

ども、老後のことなどというのは、口では言っていましたけれども、あの頃、
檜山節考なんて、深沢七郎でしたか、ありまして我々も読みましたが、何
かほど遠いことだなと思っていたわけです。こんなに切迫するようになる
とは、まあ、今から40年前ですから、我々もこういう物語があるんだな、
檜山は大変な農村だったなというようなことで、逼迫感というのはなかった
ですね。それは、みんなすべての人が若い世代で、若い時代だったから
です。だから、日本もそういった若さでもってファイトがあったわけです。
もう戦争がなくなると、ひとつこれから頑張ればやれるのではないか、
という日本人の一つの魂です。日本だけではなくて、特に昭和25年に北
朝鮮と韓国との朝鮮戦争がありました。少し逆戻りしますけれども、とに
かく川口では鋳物がこれから大変だな、これから鍋釜に戻るんだなといっ
たところに、まさか5年で朝鮮での戦争が始まって、いろんな需要が出
てきて、それでまた川口が盛り返したわけです。昭和25年代からもう30
年代まで川口は儲かって、我々の仲間は鋳物や機械工場の社長のせがれが
多いでしょう、小嶋隆善さんなどは、夜中に親父が南京袋持ってきて、早
くやれというので、札を詰めるのが大変な仕事だったということを言っ
てました。それほど鋳物屋の儲けがよかったのです。鋳物屋が儲け過ぎた
ということが、結局、鋳物屋が余りにも恵まれすぎたということでよくない
のです。苦労はしたでしょうけれども、それが結局もう昭和50年代、40
年代から50年代になってくると、いろいろなことに甘え過ぎて、まあ、
何とかなるさと、また天気になるさということで、明日があるさで、いろ
いろなものに遅れてしまって、いろいろ対策を講じるのが、行政に言って
金もないし、サラリーマンが何言ってやがるってばかりにしている、そう
いったことも多分にありました。

そして、そういった中で、40年代に入ると、今まで言葉にも出てこな
かった、「公害」がすごく大きな問題になりました。川口で公害というと、
まず、騒音公害、それから、じん肺公害ですが、特に川口の場合は、じん
肺病についてはかなり保健所などでは神経質になりました。そういったも
のの対策を行政は取り入れなくてはいけないということです。

それで、そういったところから、鋳物屋というのは、働く環境では、汚
い仕事だと思われました。だから、鋳物屋さんもだんだんやめてくるわけ
です。

ところが、昭和37年の、「キューポラのある街」、これは、早船ちよ
さんが原作で、浦山桐郎さん監督で、それから、吉永小百合さんだとか東

野英二郎さんたちが出た映画です。あの映画は非常にヒューマニティのあるすばらしい、あれは吉永小百合さんがグランプリ賞になったでしょう。いまだにときどき私は映画を見ますけれども、確かにあの当時、昭和37年だから舗装なんかされてませんよね。鋳物工場も板塀ですよ。それがバックですから、いまだに友達から電話がきて、「川口ってところはいまだに汚ないんだな」と言うから、「冗談じゃないよ、おまえ、川口に今度来てびっくりするな」ってよく言うのですが、そういうように、ああいう時代のやっぱり歴史ですよ、それで、そういう時代でした。

そういったことから、だんだん若手の職工さんになる人がいないわけです。そうすると、大変だということで、北海道へ人を探しにいたり、沖縄とか、九州まで行って、中学卒業生でいいですから、ぜひ来てくださいという、それもいろいろな施策の中でやったわけです。ところが、なかなか思うようにいかない、そうすると、じん肺問題が出てきたりすると、要するに3Kの一つだと言われてしまいました。ところが一方、生活は豊かになって、カラーテレビとかクーラーとか、それから、車もだんだん持つような人が出てきました。ですから、大野さんのときの行政というのは、一方ではそういうどんどん活気の上がることがあったけれども、地場産業はだんだん後退の方向に向かってきたということです。だから、両面にわたって、その施策が講ぜられたわけです。

それから、公害の問題があります。それと、今度はそれだけになってくると、福祉の問題がクローズアップされてくるわけです。昔は結核とか年寄りもだんだん増え出してきました。そうすると、結局、そういった面についても、福祉というものは、1人1人が揃って長生きすることが、政治の究極の目的だというふうに我々は教わったわけです。しかしながら、ただ長生きをしても、ごほんごほん咳をしたり、貧しかったり、それから、生命の不安に脅えたり、自分の人生に不安を感じるようなことをかもし出すことは、福祉の趣旨には反することだと言われました。だから、生きがいのある、俺は生きていてよかったということで人生を全うさせるには、どういうことが福祉の本質だということが問われるようになってきたのです。ですから、福祉というものを考えると、すべての行政のアクションというのは、全部福祉になるのです。それで、つまり、防貧救済、青少年婦人問題から衛生、保険、年金、住居対策等々、教育も福祉の一環である、というように福祉の範疇というものが、そのようにだんだんと変わってくるわけです。戦後の時代と20年、30年経ってくるとそのように変わ

ってくるわけです。

ですから、そういった中で首長というのは、ある面では議会へ出ると、「あれやってくれ、これやってくれ。」と注文が多いから、やらないわけにはいかない、「一生懸命やりましょう。」と言うわけです。ところが、では、果たしてそれができるかといいますと、財政だって限りがあります。何かつくると言ってもすぐに予算化はできないから、債務負担行為で、次々に借金を伸ばしていくわけです。そういった悪循環がだんだんその当時から出てきたわけです。そういった中での首長の決断はまさにハムレットのようなものですね。ですけど、それに持ちこたえて、乗り越えていかないと、ちょうど安倍さんみたくなってしまうから、安倍さんみたいな人が首長では、だめなのです。だから、私も安倍さんを見たときに、自分もやっぱり16年間政治家として、議員もやりましたが、議員さんならいいのです、大勢で何か言いたいことを言えば。でも首長となるといつも責任を感じているわけですから、そうすると、やっぱり時には死にたくなっちゃうような気持ちに陥ることもあります。だから、私が当選したのは昭和56年ですけども、向田さんがいましたよね、随筆家の、台湾で飛行機が落ちたじゃないですか。向田邦子が落っこちたと聞いたときに、「ああ、私も向田さんになりたいな。」と、瞬間的にですが思いましたけれども、言うに言われぬものがあります。議員さんからは与野党問わず注文を受ける、そうすると、それを体よく実行していかななくてはならない、スムーズに。それで、今度は、市役所へ行くと、部長さんが、「いやそれはできないでしょう。」と言ってくるわけです。「でもやりましょう。」ということで、やっぱり苦労というのはたしかにありましたね。

そういった中で、人口はますますふえ続けていくわけです。昭和20年そこそこには10万人であったものが、昭和40年には23万7,000人になり、昭和50年には33万6,000人、やがて、平成の始まりごろには40万都市になりました。そして、平成18年には50万人になりました。だから、住みにくいところなのかもしれませんが、やっぱり東京は近いし、いろいろと人がどんどん増えてくるという、そういう矛盾に苛まれるわけです。

結局、大野さんも昭和56年に市長をやめました。その間に、長堀さんという鋳物屋さんの市長が、4年間やりました。実質的に大野さんは20年間市長をやっていました。それで大野さんは、いろいろと非常にアイデアマンでして発想がユニークな人でした。最後は、病気になりまして、私はその当時、県会議員をやっていましたが、これはえらいことだ、というこ

とになりました。

それから何年かして、川口にありました日本ピストンリングがあれだけの生産力があつたのですが、引っ越してしまいました。その前には、日産ディーゼルもよそへ引っ越してしまいました。あれだけの大工場がいなくなったら、これはもう市税に差し障るし、それから、ああいう大工業は、いろいろ中小企業の下請を持っているわけです。下請の底辺というのは、ディーゼルとかピストンというのは、大概みんな下請から集まってきます。それがみんなダメになってくるわけですよ。そうすると、ああいうものがなくなると小さな鋳物屋もこけちゃうのです。それで、議会では、「川口の鋳物をどうしておまえは残せないのか。」と言われるわけです。「残せないのではなくて、みんなやめられて困ってしまうのです。」と言いますと「それはあなたが悪いのだから。」と、そういうことです。郵便ポストの赤いのは、みんな市長が悪いのだからということになるわけです。

それで、そのとき心配したのは、東京都は、ますます日の出の勢いでよくなっていく、そうすると、それと同時に千葉県が臨海工業地帯に、特に千葉市とか、それから、船橋あたりが、それをうまく利用して、工業を振興して、財政的にも非常に活発になっていくわけです。埼玉県は内陸だから、畑知事のときは、どちらかという学校をつくるとか、福祉の方に力を入れていたのですが、やっぱりそうもいかないというので、浦和、大宮、与野、上尾を中心として、ユー・アンド・アイ計画というのをバンと打ち出しました。私は、まだ、そのころ県会議員の終わりのころでしたが、ユー・アンド・アイ計画で、知事に「これは将来、政令都市になるのですか。」と聞いたら、「そこまでは行かないけれど、連合都市ぐらいにはしていきたいな。」と言うのです。「何でそれに我が川口を入れてくれないのですか。」と言ったら、「いや、川口は成熟したまちですから。」と言うのです。浦和だって大宮だって成熟したまちですよ、川口と同じく。それで、川口があんこで、周りが東京、千葉、それで、北は浦和・大宮の将来の連合都市、あるいは政令都市になるでしょう、そうすると、川口はいてもたってもいられないわけです。地場産業は減ってきますしね。

そういった中で、どうやって考えていくかということ、まちの化粧直しをしていこうと考えました。川口というまちをサンドイッチマンじゃないけど、売り出さなくてはいけないということです。それには、都市の再開発、区画整理をきちんとやるとか、それから、まずは化粧直しと言っても、全身にお化粧するわけにいきませんから、顔である川口駅前とか、その東西

口を再開発しようということにしたわけです。その起点になったのが、広い燃研が筑波学園都市に引っ越してしまったことなのです。では、その後はどうするか、通産省から払い下げた後、何かやらなくてはいけない。そうすると、商店をつくろうじゃないかという案もあるし、福祉関係のものをつくろうじゃないかという考え方もあったようですけれども、この際、産業と文化を発進するということで、音楽ホールとか芸術ホールをつくろうじゃないかということになりました。そうすると、おまえは年中歌好きで歌ばかり歌っているからそういうのをやるのだろうと言われましたよ。だけど、そんな次元を越えて何かを発信していこうと思ったのです。ただ、施設をつくっても、単なる貸し館ではだめだと、つくるのなら、徹底的にそこで企画をして演奏会だとか、企画的な芝居をやるものでなくてはならないということもあわせて、文化活動の中に組み入れなくてはならないということです。そういったことで、いろいろやらせていただきました。

その当時、赤羽のある小学校で、「皆さん、川口は荒川を隔てて何色に見えますか。」と先生が聞いたそうです。そうすると、「川口ですか、グレイです、灰色です。」と返ってきたそうです。それをうちの議会で言われました。確かに、あの当時は灰色ですよ、何か気分的にね。けれども、それは、灰色のお化粧を塗り変えることも必要ではないかということで、いろいろやっていったわけです。

それと、国民生活が豊かになってくると同時に、ごみの問題が起きました。ごみの問題は、青木町にあったごみ処理工場だけでは、もうだめだといって、長堀市長のときに戸塚に清掃工場をつくりました。それでもみるみるうちに足らなくなって、それで、ごみの分別ということについて、このごみとこのごみをどうやって分別していこうかということに取り組んだところ、このことが全国に先駆けてごみの分別に力を入れたと評価されたわけです。ただ、分別したってごみは出るものです。戸塚につくるときに、隣の草加で大分反対したので、「もうつくりませんよ。」と言ったのですが、こうなってくるとそうも言っていられなくなって、もう一度、今井草加市長のところに行って「そういう約束をしたけれども、どうしても再度、戸塚へ工場をつくらせてください。」と、頼みに行ったのです。そうしたら、今井市長は、「ああ、永瀬さん、あなたがやるというのならいいよ。」と言ってくれました。「それでは、俺たちは草加の市議員に根回ししておくから。」とってくれて、それで、戸塚に第2清掃工場ができたのです。その後、大分たってから、今度は南平の朝日へつくったわ

けです。ごみ問題はあの頃は、限りなく増え続け、行政の中でやらなくてはいけない大きな問題ということであったわけです。

そういった中で、いろいろなものができてくると、次は病院の問題が起きてくるわけです。それで、昭和32年にできた丸い5階建ての病院が、もう本当にぶっ壊れ病院なわけです。もう雨は漏ってくるし、いつ破損してしまうかわからないというので、病院を建設してほしいという声が、非常にありました。リリアができて、ようやくというところで大変でしたが、グリーンセンターの隣に病院をつくろうということになりました。同時に市営ではないけれども、工業病院も老朽してきたし、それから、済生会も何とかしなくてはいけない、ということで、市の方でも、「うちは市立病院をつくったからいい。」というのではなくて、そういうものも市の方で面倒みなくては、いけないわけです。済生会は財団法人の病院ですが、便宜をはかって取りつけ道路を直したり、駐車場を入りやすくするとか、あるいは、今、工業病院は大変な問題がございまして、これをどういうふうにしていくか、それが今、頭の痛むところであります。これからはますますお年寄りが多くなるのだから、お年寄りが多いということは、身体障害者の数も、病人の数も増えることには間違いのないのです。こういったことが、やっぱり我々のときから既に出ていました。

それから、リリアをつくるときに水の問題がありました。水というのは飲む水です。リリアのあたりをただ芸術の森にするだけではなくて、散策する桜の公園をつくって、そしてその下に、水の確保ということで、1万トンの地下浄水場をつくったのです。それで、リリアができる前に1万トンの地下浄水場を建設して、あの上にちょうど桜も咲いていますが、その下あたりがそうなのです。そうしたら、工事をやったら大変なことが起きてしまいました。工事の連壁をやっているうちに、連壁の下の方にひびが入ってきたのです。これは、大変です。そのまま放っておいたら、地盤がとにかくお化け地盤といって、ぐちゃぐちゃ地盤なのです。改良をかなりやったのですが、そのままにしておいたら、東側には鉄道線路が何本も入っているわけですから、万一崩れてしまったら、これはたいへんな騒ぎになるわけです。そこで、まず、議会に報告しました。議会の方ではとんでもない話だ、大変だというので、その年の9月議会と12月議会の2議会の質問の大半は、議員さんがみんないつのまにか地質学者になってしまったわけですよ、「市長はこんなの知らないのか。」とか、「連壁の設計を少しけちったからだ、もっと厚い連壁にし

ろ。」とか、でも、あまり厚くすると、過剰設計で、「建設屋、設計屋からいくらもらっているのではないか。」ということと言われるのです。もちろん、そんなことはないので、でっかくやれば、でっかくやったで文句が来るし、いっぱいいっぱいだとそういう問題が起きるわけです。それでしょうがないから、工事を全部中止させて、しっかり下まで地盤改良して、それで、さらに建設屋にはディスカウントさせて、もう一回やり直させました。あれから15～6年になりますが、満々として今、あそこに水が湛えられていて、特に西口方面の人たちの飲料に供されているわけです。そういうことは、地元の人でも知らないでしょう。そういう問題が起こると、誰が悪い、彼が悪いなんて言ってもらえないのです。それで、当時の水道管理者は、議会で毎晩、遅くまで攻められる。そうすると管理者が、当時の責任者だから、私のところに辞表持ってきたのです。それで、私は「あなたが使い込んだとか、悪いことをしたというのなら即刻辞めてもらうけれども、まだ議会で論議して、これから直すというときに、管理者みずからが辞めるなどということは、あなた、気が弱すぎる。」と言いました。それで、「敵前逃亡とはそういうことだよ。俺だって、辞めるなどとは考えないで、何とかこれを回復するのは、これはもうそれぞれの責任者の仕事なのだから。」と言いました。それで、2議会で質問者が20人ぐらい、かわりばんこで、みんな地質学者になったように質問するのです。それで、こちらもいろいろなところへ、県へ相談しに行ったり、建設省へ行ったり、いろいろな専門家にお会いして、かなり知識を得ました。それで、その後に、リアの14階建ての建物ができるのだから、そちらをつくる担当の建設部長に、「星野さん、あなたこのことを反面教師としてよくやってくださいよ、念には念を入れて、過剰設計と言われたっていいから、崩れないように。」と言ったのです。あそこは大体、燃研があったところは平らなところだったのです。今は、何かビルが建ったり、山になって、かなりの土盛りがしてありますからね。これはよほど、気をつけないとまずいというので、ああいふふうに山にして、今は、春は桜が咲いて、みんなのんびりと酒を飲んでいるけれども、そういった思いを考えると、私はテープカットの時に言ったのです。これをやった人の影には、私も苦勞したけれども、名も知れない課長さんとか、係長さんクラスが、「あそこを再開発するから、どいてくださいよ。」と地権者のところへ行くわけです。そうすると相手だって「冗談じゃない、俺は親父の時代から住んでいるのに、あなた

たち市役所はいいものができれば、それでいいかもしれないが、俺は一体どうなるんだ。」と言われるのです。だから、「それはお金で賠償しますから。」と言うと、「いや、それではだめだ。代替地をよこせ。」と言ってきます。それで、そういった地権者も忙しいでしょうから、夜遅く帰ってくるのを市の土地買収係が待っていたり、夜9時ごろ来いと言われれば、その人の自宅にその時間に伺うのです。中にはもう一杯飲んで、散々言い散らされますよ。中には精神的ストレスから胃潰瘍になって、完成のときには、入院していた係長さんもいたわけです。だから、私のテープカットというのは私だけではなくて、そのテープカットの裏には、「そういう胃潰瘍になって、もう市役所には出られない人もたくさんいるのだということを、皆さんもよく察知してくださいよ。」というあいさつをしました。よく今、国などでは政治家が、「官僚はだめだ。」とか、「官僚の言うことを聞いていたらだめだ。」と言われていますが、ああいう人たちも、大臣とか何かになると、最初は、お役人からいろいろなことを最初は聞きとるわけですよ。ところが、それが手のひらを返して、人前では格好いいものですから、「役所は職員がだめだ。」というわけです。もちろんだめな人もいるけれども、ただ、役所のことで申し上げたいのは、役人というのは、市長なり、トップなりから任命されてやっているから、その役人が勝手に改革やってしまったらまずいわけです。こちらが頼まないことまでやってしまうと、お先走りなわけです。お先走りでは困るのです。だから、どうしても保守的な考え方になります。

それから、役所というのは慣例がありますが、慣例というものを重んじていると物事が進まないわけです。だから、役所は、慣例、慣習、前例というものを重んじますが、それにこだわってはいけないと思います。それから、中には、役所の人でも、自分があまりやりたくないから、「いや、私は改革しました。」と言うけれど、改革ではないのです。カットです。そういうこともあり得るから、そういった面では、これは、人を使う立場の者として、自分が面倒くさいから改革したと勝手に省略しては困るし、それから、改革は、それがやりやすいように改革をするために、役人さんは、そのトップに立つ政治家とよく協議をして、そして、納得した上でやってくれということを私はよく言うのです。普通の人には、「役人はだめ。」、「役人だからだめだ。」とよく簡単に言うけれども、それは、私には、自分の16年の首長の経験から、人を愛し、信ずることが大切なこと

だと思えます。要は人と人との信頼関係です。

大野市長に秘書として仕えた時、私は最初、「俺、3ヶ月もつかな。」と思ったのです、秘書課だったときに。朝叱られ、昼間叱られ、夜中にまた叱られるのです。それで、俺はどう考えても、ちっとも悪くないのです。向こうは、そそっかしいというか早とちりというか、そうかといって、下の者が上と喧嘩するわけにはいかないでしょう。時には、俺だって辞めてやれと思ったことは何回かありました。

しかし、そのとき、大野さんの偉いというか、すごいところは、自分が怒ったこと、叱ったことを覚えているのです。それで、それを何かのときに、急に、違うところで違うようにくすぐったいほど褒めてみたりするのです。これは、会社の社長でもそうです。社長は、ただ単に威張って、ワンマンでいいというものではないのです。怒るときは怒るべきです。怒るというより叱るときは叱るべきです。だけど、それを、まるっきり身もふたもなくしてしまうような叱り方は、これは、野暮な人です。叱られた人より叱った方が気を遣う。これが、大野さんでした。

これからの政治家、これは、議員さんでもそうですが、議員さんというのは、相手というのは市民ですよ。市民が何を考えているかということ絶えず察知して、それを行政の方へ反映させたりですとか、ですから、これはセンスのある人でないとまずいのです。その逆が野暮です。野暮だとこれから政治家はできないと思います。野暮というのは、人はどうでも良くて、人の玄関口へ土足で上がってしまうような感じのことをやる人が野暮なのです。昔の警察官とか、なにかそういう人はよくいたけれども、それでは、ダメなのです。やっぱりセンスのある、ある面では厳しいけれども、ある面では人の心の中を十分に汲み取れる人、それはやっぱり行政の人にも求められると思います。それと同じことが言えるのは、議員さんは自分の選挙民だけではなくて、あまねく市民の皆さん、代表なのだから、代表者は市民の心をしっかり汲み取って、なかなか汲み取れと言っても、こっちは市民と接する時間があんまり少ないから、汲み取れとは言えないけれども、汲み取ろうとする努力、心のことです。そういうことが、私は必要ではないかと思っております。

そういった中で、いろいろな住民のコンセンサスの話で、少し前に戻りますが、昭和36年に国で街区制の法律をつくりまして、街区番号ですね。要するに、世の中がだんだんよくなって、いろいろ道路がきれいになったり、区画がよくなった、そうすると、郵便局の郵便配りが、川口でも、昔

は本町何丁目150番地とか、芝の何丁目1100番地とか、それを地図で探すと、郵便屋さんが嫌になってしまうわけです。こちらと思うとあちらだったり、右かと思うと左だったり。それでは困るということで、街区制を採用して、そして、川口では、昭和41年3月に、市議会で議決して街区方式の住居表示制度をつくりなさいというようなことが決まったのです。その第一陣が、南平地域から始まったわけです。あそこは区画整理が早かったから。そうすると、そこで地域エゴというのが出てくるのです。委員さんは、民間の人がみんな委員さんですから、そうすると、その中で、例えば、例を挙げると、朝日町というのは、昔はもう田んぼだけです。それがだんだん大きくなってきて、市になって、だんだん経てくると、せいぜい3丁目ぐらいしかなかったものが、街区制で1丁目、2丁目、3丁目、4丁目、5丁目、6丁目までできたのです。そうすると朝日町の主だった有力者が来て、「あのな、俺ん家は6丁目だ。」というのです。「1丁目だって6丁目だって関係ないじゃないですか。」と言うと、「冗談じゃない、6丁目なんて場末の感覚だからいやだ。」と。「そんなの理屈にならない。」と言うと、「それより俺たちは、町内会で日の出町という名前にしたのでから、日の出町という名前にかえろ。」と言ってきたのです。ですから私は、「それは皆さんが相談しなさいよ。」と言うと、そうすると、これは多数決的なものだから、日の出町にはならないのです。それでも1人で騒ぐわけです。そういうようなことだとか、昭和36年に街区制の国の法律をつくった時に、昔の徳川時代からあった、もっと前からあった、要するに文化財的な町の名前が、例えば、銀座ですと、尾張町などというのは、とうに無くなってしまいました。上野のお蔭・主税の真砂町の先生なんて、真砂町ってなかなか粋でいいじゃないですか。そういうのはみんな、なくなってしまいました。それで、本町何丁目とかにしたのです。これは、そのとき、我々がもっと年をとって少し理屈っぽかったらよかったなと思います。川口の場合は、6丁目が3丁目に、3丁目が6丁目になるのは大したことではないのです。でも、川口駅の近所などは、川口1丁目、2丁目、3丁目と味気も何にもないのです。そうしたら、西川口の方も真似して、西川口1丁目、2丁目って、東川口の方も、東川口1丁目、2丁目となってしまったのです。それはどういうことかと言うと、川口1丁目を提唱した人は、最初、「寿町」と言っていたのです。川口が鋳物の発祥の地で、「寿」というのは金へんに、金山町というので金の神様がいたんで、金山だけでも、金山町というのはあるから、「金」に「寿」をつけておめでたいと、

「金」に「寿」が付いて、それで、鑄物の「鑄」という字になりますね。そういったことで、昭和8年のときは、「金」を金山町に譲って、そして、鑄物の「寿」にしてやっていたのです。そうしたら、ああじゃない、こうじゃないと、あんまりその人は理屈っぽい人なので、理屈が過ぎてしまうと、じゅげむじゅげむと同じになってしまうのですが、その人はじゅげむじゅげむと反対で、「面倒くさい、えーい面倒くさい、川口1丁目にしちゃえ。」と言うので1丁目になったのです。その人は散々勉強して、イギリスまで行って、イギリスのこれはどうかって始まったから、安心していたら、それが最後に結論として、川口1丁目、2丁目になったということです。それは、あの人が言うのではしかたがないというので、何の抵抗もなく決まったわけです。これはちょっと今、考えても惜しいですね。

それから、新郷の場合でいうと、江戸袋と言って、あれは、江戸ではありませんが、地形的に袋地になっているのです。そうしたら、袋なんて邪魔だから取ってしまえと有力者が言ったので、袋を取ったのです。すると、またその住民の人たちも、もうちょっと反発すればいいのに、そうですねとって、江戸の方がいいやって、江戸町になってしまったのです。川口市江戸袋という名前が江戸町になりました。

それから、昔は、十二月田（しわすだ）なんて、十二月の田んぼですが、あれは、きつねのいろいろ伝説に伝わる物語だとか、それから、二軒在家（にけんざいけ）なんて、要するに、徳川の15代の将軍のとき、大奥の滝山が隠居したところなのです。最後の大奥の意地悪ばあさんは、錫杖寺に墓があるのだけれど、そういうのがあって、二軒在家なんて恐らく滝山がそこで息を引き取ったのでしょう。そういう名前があったのを、二軒在家は最初からないし、十二月田なんて、今の子供には読めないじゃないかと簡単に言って、末広という名前になりましたが、歴史的には何の関係もないものが出たわけです。

こういう地名というのは、その人たちが、その住民がそこで働いて、涙を流し、あるときは喜んで汗を流して、地霊が出きているのです、みんな。そういう名前を簡単に、歴史のことも無視して、ただ、これは邪魔だとか、何丁目は場末的だとかということをするものではないなということをつくづく感じたわけです。

この辺でよろしいでしょうか。まだあるのですが、あとは質問のときに答えます。

○金井部会長

どうもありがとうございました。大変エネルギーな講演でした。

それでは、時間も残されていますし、場合によっては延長することもあり得るということで。

たいへんお元気なので、永瀬前市長さんもまだまだ話し足りないところもあるかと思います。委員の方からも、ぜひいろいろと御質問いただければと思います。

○落合委員

貴重なお話をありがとうございました。一番初めのところで、明治の末から大正の初めにかけて、川口市では鋳物産業、鋳物業者が大分力をつけてきて、一方では、営業地主という立場の方がいて張り合った、という話がありました。つまり、鋳物業者と営農地主というその人たちは、つい明治の末ごろから大正あたりまではまだ張り合っていたというお話であったと思いますが、この有力者層はいつ頃から融和して、川口町政（市政）をリードしてきたのでしょうか。また、今もやっぱりその両者が中心となって、川口市の自民党を支えているのですか。

○永瀬前市長

結局、最後はみんな同じです。だけれども、最初、明治40年代は、一つの町に複数の神社を設けることは、まかりならんという内務省の通達がきたのです。それで、早速、今の氷川神社に合体しろと言ってきたわけですね。ところが、氷川神社の方ではそうではなくて、今の幸町小学校、あの辺が広いし、まだ、田んぼだったから、あそこへつくろうじゃないかといっていたのです。そのことを察知して、明治40年代の福吉友吉という町長さんが、県から来た通達を握りつぶしたわけですね。それが発覚して、なんだ町長ひどいじゃないかと、その町長は、そこで辞めちゃいました。それで、その次に、岩田武三郎が町長になったのです。そうしたら、その当時、鋳物組合というのができて、高石 太郎という高石幸三郎さんのお父さんですが、「とにかく、^{七七}そんな町の北はずれ（現在の幸町小あたり）では、大反対だ。油田あたりにせよ。」と言うのです。油田というのは、ちょうど今の川口駅の近くですが、そこへもってこいというのです。ということは、我々は金山権現様（金山神社）を拝むのに、そんな遠くまで歩いていけないということで、当時は車などありませんから、だから、「も

っと油田という金山権現の近くの、そちらへもってこい。」というのだけれども、「それはできませんよ。」ということで、大分もめて、それでは、もっと氷川神社の方にということで、町長が「自分の地所を寄付して広くするから、それで、合体して川口神社にしようじゃないか。」と妥協案をもってきたのです。そういうことで、その後、燃研を誘致するときに、今度はそのことがあるから、営業地主が、「だめだよ、売らないよ。」と拒否していたのです。しかし、営業地主だ、何だっていうけど、みんな考えると親族関係なわけですよ。それは、グループになると力は強いけれども、一個一個になるとみんな田舎のおじいさんですね、それで妥協して、結局はみんな協力していたのです。要するに、土地はみんな地主が土地を持っていて、あの頃は農商務省の言うとおりに、燃研が来たということです。

○落合委員

要するに、昔からの地主と、鋳物業にかかわった人との一時的な対立であって、基本的には同じ自由民主党支持層であったということですね。

○永瀬前市長

それと、大正、昭和に入ると、政友会と民政党の争いの方が強くなってきたのです。

○池田委員

私、先ほど先生が、鋳物屋さんというのは明治とかにできていましたが、もともとは地主ではないのですよね。今、言ったように、土地の地主さんというのがいたわけですよ。企業を興して、やはり今でいうような借金をして、土地を地主さんから分けていただいて、それで、普通鋳物屋さんというのは小さいところで500坪、大きいところは1万坪とか、それが今マンションだとかいうようになるのですけれども、これでこの鋳物さんが政治の中にもかかわってきますが、これだけ土地を買えたというのは、やはりそれだけ商売が非常に、今では考えられないくらい儲かったということです。

○永瀬前市長

儲かったのです。ところが、儲かったのだけれども、まだ、鋳物という

のは技術屋だから営業力があんまりないのです。そのころ鋳物問屋というのがいたのですが、まず、鋳物屋が何かやると、金を貸すのです。「じゃあ、あなたやるのでしたらお金を貸します。」と、要するに銀行ですよ。銀行が発達していないから、それで金を貸すとか、それから、材料を買ってきて、じゃあ、あなたに与えましょうと言うのです。鋳物屋は絶えずその問屋にやられていたのです。それで、製品ができるでしょう。問屋に納品に行くと、散々たたくわけです。たたいたあげく、長い長い手形をくれるのです。「手形じゃ、うちにかえって職工に賃金払えないよ。」と言うと、「そうか、わかった、じゃあ、お勝手にまわれ。」と言われるのです。よくしたもので、そこには問屋の女将さんがいるのです。問屋の女将さんが、「あら、表で言われたの、うん、じゃあ現金にするから。」と、そこでまた値切られてしまうのです。それでも儲かったのです。

それから、よく江戸っ子気質というけど、本当に腕のいい職人は、とにかく金が入るから、飲んだり食ったり買ったりしたわけですよ。それから、仕上げ工というのがいるのですよ。大体できたものをガラにかけたりして製品に仕上げます。それが仕上げ工で大体こう見ていくと、本当の鋳物の型込めする鋳物工は腕のいい職人だけで手数料を取るのです。逆に、仕上げ工というのは、第二軍的なものです。ところが、そういう方が、結局、そろばんが勘定いいのです。それで、大きな鋳物工場主になって儲けたりするのです。

それから、やっぱり鋳物屋さんでも、全部じゃないけど、先に見える人は土地をすぐ買ったのです。他の人が遊んでいる間に、土地を買うのです。土地なんて、みんな田んぼでしょう、二束三文です。今みたいな土地の概念ではないのだから。土地を買って、だんだん土地をふやしていくのです。だけど、大体腕のいい鋳物屋さんというのは、「人から、地主から土地なんか買うものじゃねえよ。」と言うのです。「あいつから借りて、それで儲けていけばいいんだ。」と、そういう発想もあったわけです。

○池田委員

今、先生おっしゃったように、鋳物問屋というのは、今、川口で形態が見えませんか。なくちゃったのですか。

○永瀬前市長

ないです。あれは、明治の頃から石川嘉兵衛商店なんて、これはもうす

ごく儲けたのです。その人たちは、大正時代、第一次世界大戦で、あの頃は御殿みたいな家を造ってね、その他、鍋平、それから、矢崎、そういうふうな大きな鋳物問屋があったのです。ところが、だんだん鋳物屋さんも利口になってきて、問屋に任せたのでは儲からないというので、自分のところで営業部をつくって、直接、東京へ行きました。製品にもよりますが、製品によっては、事業部もつくったのです。それで、向こうの営業部と取引をするわけです。問屋というのは、大体、主に日用品が多かったのですが、だんだん日用品の需要が減ってきたのです。それで、もう石川商店さんなんて、世界大戦が終わって間もなく、儲かったのだけれども、不況の波でいちころで、きっとそういう人たちはいろいろ手形を乱発したり、いろいろ危ない賭けをやったと思います。それで、矢崎本店は、これはもう戦後までありましたが、鍋平は、なくなってしまいました。今では、金山町の川口市母子福祉センターになっていますが、すごく粋なうちを造って、大体、金持ちの旦那というのは遊び人が多いから、川口は遊ぶところがいっぱいあって、そっちの方へはしりました。あなたさんみたいに真面目じゃなかったのです。

○池田委員

あともう一点、戦後初めての選挙で市議員36名の定員だとおっしゃっていましたがね。国会なんかも何百人も立ったと。このときの立候補者というのは何人でしたか、36名の定数の中で。

○永瀬前市長

36名のときね、これは私まだ高校生ですから、記録に出ていると思いますが、昭和22年4月の市議員でしょう。選挙記録か何かありますか。

○池田委員

25年以降はあるのですが、その第1回がないのです、先生がおっしゃっていた。

○永瀬前市長

22年の4月ですね。それは、もうとにかくあのころは、駅前に市役所の選管から電話入ると、某だれそれ何票と開票板に名前を書いていくのです、墨でもってね。それで、時間がたつとまたかわるのです。そうすると、

恐らくあの当時、細野民治さんが一番になっていると思います。

○池田委員

立候補者は70人とか80人近くですか。

○永瀬前市長

7～80人はいましたね。中には、うちの町内会などは、本町一丁目という小さい町会ですよ、そこで3、4人出ちゃったのです。要するに乱立したのです。俺も出る、俺も出ると、あんなバカ何で出るっていいながら選挙に来ているのです。選挙だってやり方が、今と違って、もう朝から晩まで、選挙所へ詰め込んでいて、鋳物屋でしょう、みんな酒飲んで、「おお、酒がたんないぞ。」なんて、「冗談じゃねえ。お祭りは1日で終わっちゃうけど、選挙は10日ぐらいあるのだからうめえや。」って。ひどいのです。子供連れて、奥さん連れて、飯食わせろって、そういう選挙が私たちの出る、ちょっと前までありましたよね。今はもうお茶だって出さないでしょう。

○神尾委員

朝日6丁目の日の出公園の横に住んでおります場末の神尾と申します。
お願いいたします。

○永瀬前市長

まず、朝日6丁目は場末くさいから嫌だって言うので、小川さんというおじいさんがいたのです。毎日新聞社にいて、私と仲が良かったのですが、宇田川さんも私も当時、市議でおりましたが。そんな3丁目、6丁目でもいいじゃないかというのが私どもの意見でした。6丁目、日の出町でしたね。

○神尾委員

質問に移らせていただきます。今、いろんなお話を聞いて、これからの基本条例をつくっていくに当たり参考になる部分が本当にたくさんあったなと感じました。その中で、もう本当に私、実は質問したいことが10項目ぐらいあるのですが、それ全部というわけにいかないで幾つか聞きたいと思います。永瀬前市長は本当にたくさんのお言葉をいろんな場面で残

されているのですけれども、その中でも特に私にとって印象深かった言葉が、住民よりも市民であれという言葉が残って、何かで読んだんですけれども、その言葉をもう少しどういう意味かなということ。住民よりも市民であれという。

○永瀬前市長

今、一番悪いのは、まちについて無関心というのは困る。住んでいる人が反対なら反対でも、関心があるから反対なのです、物事は。反対でもない賛成でもない、無関心、俺は知らないよというのが一番、これは日本を害していることだと思うのです。反対だったら相手方のところへ行って、すがりついてでもね、反対なんだと。それから、賛成ならこれ問題ないですよ。だから、私はよく、市民と住民がいるというのです。市民というのは、この町に来てこの町でご飯を食べている、この町で住んでいる、この町で寝ているのだから、何かひとつ関心を持ってくださいということです。そして、何かあるたびに、一つでもいいから、何かじゃあ俺もやってみようかなという意欲を持つ、別に勤労奉仕しろとか何とかというそんな大上段的なものではなくてもいいから、何かこの町に関心を持つ。俺は関係ねえよと、木枯らし紋次郎では困ると、それは、市民権を放棄した単なる住民と思うのです。

現代社会のブラックホールは故郷や住んでいるまちに関心を示さぬこと、ただ、もう食って寝て何にも関係ねえよと、これは、もう市民とは言えない、住民ですよ。選挙だって棄権してはいけない。まちに関心のない人というのは、それがうんと揃ったら、それは恐ろしいですよ。だから、反対でも何でもいいから、関心を持ってほしいのです。私は一番無関心が、罪悪だと、そこまで普段考えています。それを申し上げたい。

○神尾委員

では、今、市民ということでお話を聞きました。次は、議会と行政ということなのですが、議会の活性化がとても大事であるとおっしゃっていました。ただ、大野市長がまだ市長じゃなかった、大泉さんのころですか、何かまちの総会のような話し合いが自由に行われていたということだったのですが、それがだんだん今の議会の形式になっていき、今は、会議の前にあらかじめ党派内とか党派間の中で調整をしてから議会にかけるので、何か議事録を読んでも、もめている様子はほとんどなく、通っていったし

まうのだなと、そういうことなのですが、一方で、行政の方は慣例を重んじていては物事が進まないから徹底的に話し合う必要があるということと、もう一つ市民が何を考えているか、酌まなくては、いけないんだということを考えていくと、現在のそういうあり方でよいのかなと。これから私たちが議会についてとか、市長についてということ話を話し合っていく上で、今の川口市議会の体質とか、すみません、生意気なこと申しまして、本当にごめんなさい、そういうところの改善すべき点等がありますか。

○永瀬前市長

昔の市議会の会議録を見ていると、そういう議会ルールだとか何かが、戦争直後のときは、それこそ町内会の総会と同じく、質問がある人はすぐ手を挙げて、じゃあ、あなたと言って、私は反対ですとなるわけで、実にフランクな会話が流れていました。私は、図書館行って昭和22年以降の議事録をとときどき見ているのですが、これが我々の頃になってくるとすごくきちんとした決まりで、あらかじめ事前に質問も通告するようになったのです。以前は、通告もなかったもので、誰かがしゃべっていると大急ぎで質問通告を書いて、ぽっと議会事務局に持って行って、それがすぐ議長に行ってももちろんオーケーと言え、それでできた時代です。

ところが、今、一番そういう面でかわってきたのは、県会なんかすごいのです。県会へ通告するでしょう。そうすると、今日、出すと翌日かなんかに向こうから電話かかってきて来てくれというのです。そうすると、ヒアリングというものを設けて、担当の部の係員がずらっと、ひどいときは50人ぐらい揃っているのです。それで、「どんな御質問をされるのですか。」と聞かれるのです。「通告書に書いてある。」と言うと、「通告書にあるぐらいではだめなので、どこがどうとわかるように。」と言うのです。中には、「いや、これに対してこういうふうに答えればいいのでしょうか。」と言うので、「いいよ答えたって、だけど、気に入らなければ、第2質問、第3質問があるのだから。」と言ってやるのです。そういうのは慣習化されていたのです。

今は、県会議員じゃないからわからないけど、私が県会議員10年間やっていたときに、その通告とヒアリングですか、でっかいところで本当にいんぎん無礼に聞くわけですよ。それで、「それはちょっと困りませんか。」とか、今でもあるのではないですか。通告回ると、議員さんのところへ、これはちょっとお手柔らかに願いたいとか。

だけど、それはやっぱり議会ルールの中でということであって、これをどうのこうのということは、国会なんかに行くともっとひどいのではないのでしょうか。やっぱり大きな国会だとか県会だとかというと、すごいそういう中でやっているわけです。

私は、実は自分でいろいろ言ってきたけれども、最近は、もっとアメリカのような委員会制度がいいと思っています。10人ぐらいで、こうやって、このぐらいの席上で、質問したら、じゃあ、あなたはこういうふうに考えるのか本当にと、逆にこっちも質問するような、そういう双方向性の方がいいと思います。今の日本の議会は一方通行です。テレビやラジオと同じなわけです。だから、それじゃあ、あなたこれだけ質問するなら、こういうふうに私は考えているのだけれどもどうだよと、そういうような生の声が一番一般の住民に近いものだと思います。

○神尾委員

では、定例会ではなくて、それ以外のいろんな常任委員会とか、あいうものでは、こういうところで、そのようにフランクに話されているのですか。

○永瀬前市長

全員協議会というのがありますけど、ただあれはあんまり開いてないでしょう。よほど重大問題でないとだめです。それで、歴史の話になりますが、戦争が終わるまで、市では、議会があると、参事会というのがあったのです。参事会というのがあるので、議決が二重議決になるのです。それで、重要問題は参事会の提案にものせますので、議会で特に重要なものは次は、参事会で諮るのです。参事会員というのは、市会議員さんと、それから、市長、助役、三役も入っているのです。それが参事会です。それで、そんなのおかしいじゃないかと、ちょうど戦争中の枢密顧問会、枢密議員と似たようなものだとか、そういう枠も外してきて、私はできるだけそういうものは外して、国会なんかでも、参議院などはなくしちゃって、生の声がすぐ届くようなやり方がいいのではないかって、今、一市民として、まさにそんな考え方です。

○神尾委員

もう少しよろしいでしょうか。では、次は、今、市民、議会、行政と来

たので、次は市長ですけども、このところ市長の方々は市で働いた後に県議に出て、そこからまた市長として戻られるパターンが続いているような気がするのですが、そのようなものなのですか。

○永瀬前市長

埼玉県は偶然に多いですね。

○神尾委員

偶然、ということは、今の県議会議員さんのあのメンバーの中に次期市長がいる可能性がある。

○永瀬前市長

今の県会議員の中で市長をやりたい人？それは皆さんが選ぶのだから、だめだと思えばだめになっちゃう。それは、そういうものはないですよ、必ずいくなんて。たまたま私が市会議員から県会に行って市長になって、それで、岡村さんがたまたま同じコースをたどっているの、あいつらができるなら俺たちだってできるって、みんなに希望を持たせてやらないと。よそだってそうであって、川口がやっているのだから、俺たちもやろうじゃないかと。

だけど、一時私が市長になったころ、県会議員を出て市長になった人で集まりとかやったのですが、そうすると、俺たち県会議員のときはこんなに大変じゃなかったのと、市長は大変だになってみんな泣き言を言っているのです。じゃあ、あなたたち懲りたの、後悔しているのと聞くと、後悔しているわけでもないのです。だけど、そういう決まりはないですよ。

○神尾委員

今のは前振りですけども、つまり何かといいますと、次の市長に望まれることはどんなことですかということと、現職岡村市長は今一番苦労なさっているのはどんな点なのでしょう。

○永瀬前市長

どうでしょうね。私は、市長をやめたてから、市役所へ10年間行きませんでした。私は、岡村さんと親しくて、選挙のとき、応援したが当選したから、私がノコノコ市長室なんかに行ったら、これはみっともない、一番、

野暮なことじゃないですか。そうしたら、たまたま、市議会議員をやめた元議員の議友会というのがありまして、その議友会の会長にさせられちゃったのです。これは別に何の権限も何もない。だから、ときどき議会事務局へ議友会の会合には行きます。

それから、この間、「二人のクロード展」があったときに、私、アートコアというところの代表をやっているんで、実行委員会がクロード展を手伝ってくれというのです。自分が手伝うと、こういう性格だから、だんだん入れ込んできちゃって、そうすると、役所の美術担当の人たちのやっていることがもどかしく思っけきちゃうのです。そこでこらえていれいいのですが、すぐにこういう性格だから意見を言ってしまうのです。私自身、老いぼれが来てうるせえこと言っていると、思われたくないですよ。老兵は舞台を降りたら、観客席の末席で黙ってすわる、これが、私の哲学です。ただし、関心は捨てません、市民ですから。

だから、岡村さんにこれからどう望むとか、それから、どう思うということは、これは言うべきじゃないと思います。ましてや、全然岡村さんが会ってもいない知らない人ならいいけど、近い人で、しかも、これから皆さんが条例つくろうって意気込んでいるのに、岡村市長にこうあるべきだっていうのは、これは越権と野暮の二重です。とにかくトップというのは、非常に孤独です。それを察してあげねばなりません。

○池田委員

ぜひ言ってください。

○永瀬前市長

それは言うべきじゃないですよ。親しいからこそ。

○神尾委員

最後にいいですか。まちの化粧直しということで出たのですが、この当時、永瀬市長が企画なさったのか、大野市長が企画なさったのかわからないのですが、市民に向けて結構長めの論文を募集していますよね。それで、いつも市長賞をもらうのが、このまちをやっぱりもっときれいにしてほしい、電気をたくさんつけてカラフルにしてほしいというのが常にトップの賞をもらっていたように思います。というのは、私も図書館が大好きで、あの辺ふらふら歩いてその本を見たのですが、その化粧直しの頃から、駅

前の再開発とか、要するに総合開発へとわっと進んでいくのですけれども、その総合開発ということでいかがでしょうか。

○永瀬前市長

当時、商工会議所あたりで、いろいろこれからの将来像、まちづくりと
いって、答申を商工会議所の会頭の名前でいろいろ研究していたようです。
そこには、産業がだんだんおかしくなってきたとあるのです。これに近代
産業の、例えば、今、アーカイブなんかやっているでしょう。要するに映
像産業とかそういうものにかえていこうとあるのですが、そういったもの
をいきなりやるといっても、なかなか来ないし、第一、このまちに来て、
駅前に降り立った時に、こんなまちに来たくないやっという人に、まわれ
右されないようにするには、やっぱりこのまちに来て、オッというものを
感じるよう、やっぱりお化粧づくりも必要なんだと思います。それで、商
工会議所でもそういうアンケートも出てきたのです。それから、論文を市
の方で募集していましたね、一般の人のですね、そういったものを我々は
しょっちゅう読みます。私の時代にそういうものはできたかもしれないけ
れども、私の1人の意見ではなくて、皆さんの意見を勘案したり、総合し
たり、だから、そういう意見の中で取り入れられないものもかなりあった
でしょうが、できるだけ取り入れようという努力はしたつもりです。そう
いった中で、いろいろなものができてきたので、これはやっぱり市民の人
の声ですね。

それから、私も、まだ若かったですから、そのころ若い青年たちと、30
代ぐらいの人と朝めし会を個人的に開いたりして、なかなか突拍子もない
ことを若い人が言うのです。川口という名前がダサイからやめちゃおうじ
ゃないかと。じゃあ、何という名前にするかというと、「ノース東京
1110」、それは、川口を横に書くと、1110番になるので、それにノース
東京をつけて、そういう名前どうだっていうから、それは、やっぱり一般
受けしないよ、一人よがりだよって言いましたね。とにかくそういう意見
など、突拍子のないことも言われました。でも、そうかって話は聞くけど、
なかなか実行となると、決めるのは、最後はトップが決めることですから
ね、でも、そういう提案というのは本当にありがたいですね。

○神尾委員

どうもありがとうございました。

○落合委員

今のことに関連して質問です。永瀬前市長は、市民の声を参考にして、新総合計画という全体計画をお進めになったというお話がありましたけども、市長が考えている「市民」というのは、どういう範囲またはイメージのものを言うのでしょうか。

○永瀬前市長

さっき言ったとおり、俺は関係ねえよという人は、これはもう私はそういう人とはお話ししませんよ。

○落合委員

「市民」について質問の仕方をかえさせていただくと、「どういう層」だとか、「どういう地域の人々」だとか、どんな人々を強く意識したか、という観点からでは、どうでしょうか。

○永瀬前市長

どういう仕事をやっているかとか、年齢だとか、それは、関係ないですね。こういう仕事をやっているから俺は嫌だとか、年をとっているからだめだとか、ということはないです。年をとっていったって若々しい我々のような人もおりますし、若くたって、なんだかやる気がなくて、とっちゃん坊やみたいな人もいるでしょう。だけど、それでも一生懸命お互いにくらいついてこられるなら、それでもいいと思います。だから、どういう層だからとか仕事や職業だとかで差別はしていないつもりです。

○落合委員

歴史的にみると、今までは鋳物産業が自主的に結構、力を持っていたし、そういうところに市政を動かす力があったような感じもするのですけれども。

○永瀬前市長

今までは、我々のときはあったけれども、もう鋳物さんも100軒わっちゃいましたよね。それで、鋳物屋さん自身も、自分のまちをしょってるといふ気概が昔ほどはないのです。

○落合委員

逆に私は川口市と戦後合併した新しい地域に参入してきた市民ですが、例えば、さきほど言われた戸塚だとか安行だとかでは、その新住民の多くは東京に通勤するサラリーマンで、逆に地元の人には農業ですね。鋳物とは関係が希薄な地域の人たちですけど、そんな地域特性、住民事情がどのように総合計画の策定にあたり理解されたかという関心はありますけど。

○永瀬前市長

私、エルザタワーにずいぶん知っている人がおりますが、一緒になって気功やったり、歌を歌ったりしてね。その歌を歌っている女性で、結構東京から来ていて、歌が終わった時や、気功が終わった時にいつも別なところで、今日はお茶会しますかって言うと、実に私の歴史の話に関心を持ってくれるのです。それで、その人が、「いや私、去年まで東京にいて、川口なんてへんなところへ来たと思った。」と言うのです。だけど、我々と接すれば、別に愛しなさいとかってね強制はしなくても、関心だけもっていただければ、これは立派な市民じゃないですか。いくら言っても「関係ねえ、関係ねえ」って、そういう人じゃ始まらないですからね。

○林委員

先ほどのお話いろいろとありがとうございます。その中に、狩野川台風をきっかけとして、芝川の洪水を防ぐ改修ということお話が触れられていましたけれども、この改修、いわゆる新芝川、それから、芝川放水路がつくられ、旧芝川の方が閉鎖水門となった工事に着手されたかと思うんですけど、そのことについてちょっと永瀬前市長さんもおっしゃっていたように、川口市政の中でこれは非常に大きいものだったということをおっしゃってました。そのことに関して3つ質問なんですけど、1つは、全く旧芝川を閉鎖することで、洪水対策にはなったと思いますが、もうそれまで行われていた舟運、それから、鋳物や味噌なんかのそれが舟運に使われていくということが全くここで終わりとなったわけですね、決定的に。その時代もどのようにとらえ、施策的にはどうなさろうとしていったのか。

また、2番目の質問が閉鎖水門になることによって、水の流量が非常に減り、流速も落ちました。そういったことで、その後、芝川の旧芝川が非常に汚れていったということが後からは出てきてます。で、当時、そのことがどのように予測され、どのように市政としてなされようとしてたのか。

そしてまた、その芝川の改修について、大野市政、それから、永瀬前市長さんの時代にはどのように関わり、また、当時、行政、市民、議会が当時その問題についてどうであったのか、その辺のところ、以上、3点をすみません。

○永瀬前市長

狩野川台風が昭和33年にありました。そのときはもう本当に全市ほとんど冠水して、それで、あわてて新芝川をつくった。それ以前は、幾らか掘ってはいたのですが、ほとんど工事が行われていなかったようなもので、これは大洪水を機に突貫工事で、特別な起債をしたり、補助金もつけてもらったりして、それでやったわけです。そうすると、従来流れていた旧芝川の流れがよどんでしまったわけで、水は汚くなる、それから、どうしようもなくなります。

そこで問題が起きたのが、これがちょうど昭和55年ごろですが、ちょうど大野市長のときにこういうことを言った人がいるのです。「どうだい、あんな汚いのだから、あそこをふさいじゃって、下に鉄管を入れて下水にしちゃって上に車を通したら。」という案が出て、それで、それを大野市長が新聞でしゃべったらしいのですよ。そうしたら、河川というのは埼玉県の所管で、埼玉県のそのときの河川課長で嘉門さんという人が怒って電話がかかってきたのです、市役所に。「何を考えているんだ、あなたは、大体あそこの1級河川は、そんなふたをしちゃうものではないのです、河川を何と考えているのか。」と。それで、私、そのころ県会議員だったから大野市長さんと2人で課長のところへ行って、「いや、あれはちょっと誤解があります。」と言って大野さんと謝りました。河川は嘉門課長さんの発想では、川を東京都みたいに、ふさいでしまうということは、これはもう邪道だと。東京都はそういうのはいっぱいあるけど、川はやっぱり財産だということです。それで、今度は、法律まで新しくそのときつくって、要するに、環境緑化対策という、新しい予算項目を国の方でつくってもらって、それで、その工事は県が中心ですから、県を中心にやって、市はそれに対して一生懸命手伝いました。それで、昭和56年からその工事に入ってきたのです。旧芝川を流れのある公園的なものにして、その青図がかかれて、川をもっと遊び地域にしたり、それから、旧芝川のそばに家を建てる場合は、オランダだとか何かは川に向かって玄関があるのです。ところが、全部あそこは便所が川を向いているのです。そういうのはもう本

当に愚の骨頂だという発想も出て、それで始めたのです。

ところが、それを始めたころから、県の方では財政的に遅々として進まないのです。それで、あれはどんどん芝川の水を逆流して流して、それから、毛長川の水も入れてもっと水量を多くして、かつては、あそこを徳川時代とか、大正時代までは、鑄物の舟が魚を持っていたり何かした時代もあったのに、今はもう鉄道とか車の時代だから、その舟運を別に大正時代に戻すということもないけれども、やっぱり人間が住むのだから、人間が住むのにいいような川の流れをつくろうと、流れないと川は腐っちゃいますから、もつものにしていこうという、その方向づけが出て、それについては遅々としていますがそれでもやっているのです。ただ、私たちもやめてもう10年になりますけれども、前を通るたびに、なんだまだ進まないのかと思っていますけどね。そういう方向になっているのです、ただ、まだ進まないわけです。

それで、今度は新しい上田知事さんが選挙項目の中で、最初の三大公約の中で、川について、緑と川に力を入れていると言っているから、この間、私が選挙演説でわざわざ手を挙げていって、俺やるからと言って、この前は知事の対立候補を推しましたが、今度はやりますよと。だから、あなた、公約で、第1項目、3つのうちの第1項目で川をやったのだから、それはやってくださいと。

明日、私のところに県の河川課の新しい課長が、あいさつに来るというから、「それは知事さん、私はプレジャーボートの仕事もまだやっているけど、もうやめさせてくれ、76歳のおじいさんに、何で河川公社の理事長だ。」っていうつもりだよ、月給なんてもらっていないよ、もちろんいらないけど。だけど、「やっぱり何だかんだ理事長をやっていると責任があるでしょう、事故でも起きたら大変だぞ。」って言って、だから、あした来たら、「知事が本当にやる気があるなら、まず、私を馱にしてください、パリパリした人を連れてきなさい。」と、そして、河川を、もう本当に芝川なりにおっしゃったとおり、それはもう知事の第1公約を実現させていただかないとダメなんだってことです。そのとおりなのです。

やっぱり、芝川は、水害で、新芝川はよかったのだけど、そのデメリットとして川が濁っちゃった、止まったわけですね。止まる川なんていうのは、もう川の常道からいってまずいですよね。本当は都市計画ですよね。川に向かって玄関をつくるようにして、それで、川が流れて、そこで人がボート遊びぐらいできて。何も鑄物を今さら運んだってしょうがない

のだから、それはトラックがあるのだから、だからいいじゃないですか、そういうことで。子供が川のところで遊んで、オランダなんかによくあるでしょう。オランダとか、フランスのセーヌ川とかは、また別ですが、小さな川があるわけですよ、そんなような形にしたらいいと思います。ただ、私があり、市長がやるようなことを言ったら、あいつ、また市長に戻りたいなんて思われちゃう。そんな気持ちは、さらさらないですから。

○宮原委員

永瀬さん、今日は、どうもありがとうございました。所用で遅刻してしまい、すみませんでした。スポーツの運営のことでちょっとお伺いしたいのですが、実は私、市議員になっていたときによく市民の方から言われました。大野さんは、大野市政のときにはスポーツを頑張ってくれていた。永瀬市政になってから、文化になった、スポーツはやってくれなくなったという言葉が無責任によく耳にすることが多かったのです。それは、私は、実際何でそういうふうに言っているのか、いまだに意味はわかりません。しかしながら、自分の実体験と、あと川口においてのスポーツの世界をちょっと文献で調べましたところ、大野市政のときに、例えばプールができ上がったり青木町公園ができ上がったり、いろいろな環境が、スポーツをできる環境が整いました。そして、永瀬前市長の市政になってから、実は数々の種目でオリンピックに出場し、また、オリンピックでなくても世界大会で活躍する選手がいっぱい出ました。ところが、今度、岡村市政になってから、ちょうどその永瀬さんの市政の時代に華々しく世界の舞台で活躍した、例えば、ピストルの選手、ウェートリフティングの選手、マラソンの選手、野球の選手、ちょうどその選手たちが年齢的には20代から今度40代になって指導者としてもスペシャリストの世界に入って、なぜか岡村市政になってから世界に活躍するような選手がこの川口からぱったりと消えました。

しかしながら、背景としてみると、ジュニアの子供、例えば野球のリトルリーグもそうですよね、子供、ジュニアのエリアでは、世界に通用するぐらい頑張っている選手、子供たちがたくさんいるのです。永瀬前市長から見て、もしかしたら、たまたま永瀬さんのときに、そういう人材の発掘の時代だったのかもしれないと言われたら、もう話はおしまい、逆に、表でそういうふうに永瀬さん文化だよと、例えば、多分リリアを完成させたから、そういうイメージが強いだけの話であって、もしかしたら、永瀬

前市長の中に、かげながら何かスポーツの選手たちが活躍できる場を、思想的にバックアップしていた部分があるのかなと。なぜ今、岡村市政ではそうなれないのかな、大変もったいない気がします。

高校をちょっとかいつまんでみても、永瀬さんの市政時代には、市立高校がウィーンに行って世界大会でメダルをとったり、ほかにも弁論大会初めコーラスの部分でも数々の高校が、やはりその学校の特色を生かして、日本じゃないですよ、世界で活躍していた時代があったのに、なんでそれが裾野が広がっていかないで、今、陰も形もないようになってしまって、ましてや、高校を見ますと、市立高校、県立高校、この川口にある高校が、本当に特色のない学校に映ってしまっていて、多くの子供たちが橋を渡って都内の方に行ってしまうている。都内や地方でも、実際、高校野球初め、陸上もそうです。陸上でいうと、この川口市出身でありながら埼玉栄で全国クラスで頑張っている選手もいます、実際に。陸上でいえば、都内の高校で頑張っている選手もいる。なぜ出ていってしまうのだろう、なぜこの生まれ育ったふるさとでスポーツの分野で発揮できない土壤になってしまったのか非常に疑問です。

だけど、結論的におまえが市会議員やっていたときにそれを頑張ればよかったのではないかと言われたらおしまいなので、そこのところは触れないでください。

○神尾委員

発言してらっしゃいましたよね、3月にその件で。世界に通用するアスリートを育てるという。

○宮原委員

志半ばでちょっとやめっちゃったので申しわけないのですが。永瀬前市長の志を伺えれば、ありがたいです。

○永瀬前市長

大野さんのときに一生懸命やって、本当によその市ではプールを全校に、小学校から中学校まで全部やるっていうのは、学校建設だけでも、なかなかほかの市では浦和も大宮もやろうとしなかったことですよ。でも大野さんは、自分もスポーツが好きだし、しかも水泳の選手だから、へえ、プールをこんなにつくるのかよと思うくらいに、思い切ってプールをつくって

いましたよ。

○宮原委員

全校につくったのですか。

○永瀬前市長

そうです。それと同時にスポーツマン市長でしたよね、青木町公園ができて、いろんなことにアタックしていましたよ。それで、私のころにはもうたしかにプールはできちゃって、国体が来るから、神根に土地を買って、それでひとつやろうかと言ったのだけれども、これは、岡村さんが悪いのでも何でもなくてね、財政的にそこまでできこないだろうということで、これは、断念せざるを得なかったのです。

結局、スポーツでは、国体あたりは、以前は出場するというのが一つのステータスだったけど、今はもう、すべてグローバル化して、国体の選手といっても、あんまりみんな感激がないし、例えば、外国に遠征している選手に国体があるから早く帰ってこいって言うと、冗談じゃないよと、俺はこれから帰りにイタリアへ寄って、どここの大会へ出るんだというのです。川口で国体やるのでね、水泳の選手にそれまでに間に合うように帰ってこいって言ったって、ちょうどギリシャの後でしょう、帰ってこない選手が随分いたのです。これはもう国体なんか、昔はステータスだったけど、そういう時代じゃなくなってきているわけです。そういった中で、学校によっては、埼玉栄だとか、それから、愛ちゃんの、卓球の青森山田だとか、これは徹底した英才教育やっているわけで、そうすると、その学校を目指して、親たちがもう全国から来るわけです。到底市立高校じゃね、それはもうやりたくてもできないわけです。

武南学園は、それをやろうということで昔始めたのです。それどころじゃない、学問もあり、スポーツもありで、サッカーなんかちょっと出たことありましたけど、これは、やっぱりそういう一つのもので、岡村市長になって、なんだ、たいしたことないなんて言ったら岡村さんがかわいそう。それよりもやっぱり、私はあんまりスポーツばかになっても困るので、私はえらいと思ったのは、あそこの埼玉栄でスポーツできるから勉強できないかっていうとそうじゃないんだよね。勉強もできるのです、すごく、他の水準よりずっと高い。スポーツもだめ何もだめ、みんな関心がないというのが一番困るのです。だから、残念ながらまだあらわれてきていません

が、やっぱり教育だから長い目で見るということと、その方向に向かって市長さんがやっていくと思うのです。これまた、私がやらなきゃいけないと言うことはできないですけど。

○宮原委員

陰ながらご尽力をお願いします。岡村市政を否定しているわけではなくて、たまたまめぐり合わせで何でそうなのかなということを、ふと日々疑問に思っているということです。

○金井部会長

大分、時間も超過しておりますが・・・。

○神尾委員

最後に1点だけ、本当に1点だけよろしいですか。すみません、何度も。これから条文をつくるに当たり、まず前文というものを立てるに当たって、川口らしさという言葉絶対に入れていかなければいけないと思います。ところが、川口らしさは職人の川口気質ということで現代は語れないような気がします。そこで、今、そして、今後に生かせる川口らしさというのを永瀬前市長はどのように見てらっしゃるか。

○永瀬前市長

職人になれっていうのではなくて、要するに、ものづくりをする、ものづくりということは、何も鋳物だけじゃなくて、一生懸命働いて、何かをものにしていこうということです。場合によっては、必ずしもハードのものだけじゃなくて、ソフトのものにつながるものでいいと思うのです。だけど、何かを成しえようじゃないかと、我々の先祖は、一生懸命ものづくりで一つの気質までつくってきたのだから、だから、その命はつながっていくんだということです。

川口の市民歌に、「朝にひぐれに 幼きあの日 キューポラかぞえて君と僕」というのがあります。あれは昭和37年ですね、サトウハチローさんと呼んで、これは公募しないで、サトウハチローさんに作詞をお願いして、曲は團伊玖磨さんにやってもらおうとしたのです。それでサトウさんが来たわけですが、私、ちょうど秘書課にいましてね、サトウさんがちょぼひげはやしておりまして、荒川の土手へ上がって、それで、「朝にひぐ

れに 幼きあの日 キューポラかぞえて君と僕 機械の響きに」と、それから、前川の方から芝の方に行って、3番目の「竹の葉 通してきこえる音に はた織る姿もうかび出る」と、やっぱり産業が歌われているのです。それから、4番目に、「光るラインに」って、これは大野さんがスポーツマンだったことからだと、サトウさんが言っていましたよ。それで、ウナギ屋でしこたま酒を飲んで、サトウさんはのんびりですから。それで帰って、サトウさんがあの太いペンで書いて送ってきました。それを下山 懋（ツトム）さんという当時の教育長が、文学者だったから、いろいろ手直しして、それで作詞ができたのです。それを、今度は團伊玖磨さんが、あのころを代表する音楽家でしたから、作曲をお願いしたわけです。すると、曲ができたから来てくれと言うので行きましたら、やっぱりいろいろ詩の方から連想させると、少しリズム感があったのでしょね。普通、市民歌なんていうのは重々しいでしょう。どんどんかどんとか。そうじゃくて、たたんたたーんって、シンコペーションなのです。シンコペーションというのは難しいのですが、たたんたたたん、そういうのも入れてますよと、團さんから詳しい説明をいただきました。それが、今、式典で歌われています。

そうすると、中には、「なんだキューポラなんかないじゃないか。」と、「キューポラ探して君と僕」にとってかえようかって、冗談じゃない。そうじゃなくて、それは、ものづくりの心というのが、幼きあの日思い出としてあるのだからという、それが思想なんです。そのものづくりの思想というのは、たとえキューポラ探してとなってしまうかもしれないけど、相当幼い目には浮かんでいたということを信じてやろうというものです。だから、こういうものを突き詰めていくと、こういう市民歌とかは、これ以外にも、市民憲章というのがあります。昭和42年ですか、あれには、明るく豊かなすみよいまちづくりとありますよね。ああいうものとの整合性はどうするのですか。今度はこちらが質問したいですね。そういうものは、市民憲章として、あれはきちんと議会で承認されているのだから、それをやめちゃうのか、生かすのかは、それは今度、委員である皆さんの仕事ですよ。それから、市民歌というのはやっぱり川口市を象徴する歌なのだから、それを生かすのかやめちゃうのか、それを今度やってくれともやってくれないとも言わないけれども、皆さんの宿題となるわけですよ。

○神尾委員

たたら音頭もですか。

○永瀬前市長

今、毎年、盆踊りで歌っている「たたら音頭」と「たたら節」とは、全然違うのです。「たたら音頭」は昭和54年頃、たたら祭のために作った新しい曲ですが、昔から伝承されている「たたら節」は保存会もあるくらいで、こぶしの多い曲で大正時代、鋳物屋の親父連中が芸者に「南蛮鉄でもたたらにかけたら溶けねばならない、・・・はなだ」と言って着物をまくる踊りだったのです。それを昭和42年の埼玉国体の時、当時の国体事務局がアトラクション用に市内の浅香山治さんという音楽家にピアノ用アレンジし、これをさらにブラスバンドに編曲したのです。まあ、今、聞いてもあまりぱっとしないですね。私たち、その頃若かったから、何でもトライしようとして何でも手を出しましたがね。そして、先ほど述べた「たたら音頭」は、これは私が市長になるちょっと前、大野市長さんがたたら祭りをやろうとってそれでやりだしたのです。そのときに、もう誰にでもできる優しい振付けで、「たたらたたら」って、それは埼玉県の人が、どうもあれを踊りだすと雨が降りそうな感じがするというのです。私は、あれをやらせたけど、今、後悔する思いでして、今は、よさこいソーラン、ああいうやつの方が流行っていますよね。それで、私は、途中で「たたらたたら」って雨降りそうなのを見てね、それで、ブラジル行ってブラジルサンバを、まだあんまり知られていなかったら、ブラジルサンバをたたら祭りに入れようとして、こっちもスパンコールで馬鹿みたいにチンドン屋のようにやりましたよ。やっぱりそういう意気込みだよ。中には、「市長が馬鹿みたい、あいつ何やっているんだ。」と言う人もいて、そうしたら、寺島さんが議会で質問したんだよね。サンバは裸でしょう。「裸の外人と一緒に市長がこの不景気に踊っているとは何事だ。」と、議会の質問なんです。それで、私は、「冗談じゃない、寺島さんね、こんなに不景気なんだから、サンバでも踊って景気直していかなくちゃいけないと、私は心で泣いて、顔で笑ってそうやって踊っているんだ。」と言ったら、寺島さんが、「ああそうか。」って、それで終わりなんだよ。それで、終わってね、寺島さんのところにいって、「寺島さん余計なこと言うなよ。」と言うと、彼は「そうじゃないんだ、あれは自民党から言ってくれと頼まれた。」って言うのです。そして、寺島さんが、「何だ自民党が、

じゃあ市長の足を引っ張っていたのかよ。」と、大笑いしました。

そんなようなもので、何党だからどうのというのではなくて、一生懸命やって、やっぱりそういうことは、裸の踊りはまずいよと思ったら言ってくれて、そうすれば、それに対して、これだけだったのですよ、ああ、そうかいって、そんなものなんです。

○池田委員

話の中でもものづくりということで、今、鋳物屋さんが100軒を割ったけど、全国一機械工業とかいろんな企業が集積している川口は全国一です。やっぱりそういう点からものづくり。だから、今、SKIPも新しい産業を興そうということで前市長の時代から何十年もかかってやってきているから、バックボーンというのが私はものづくりというのは、やはりこの川口の背骨かなというふうな気がしているのですが。その中で、鋳物屋さんが出てきたり、いろいろなことが出てきますけれども、これからもこの我々、第一検討部会は、ものづくりというものを何とか背骨に残せばいいかな、というふうには個人的には思っております。

○永瀬前市長

NHKでその当時に、アーカイブってあったのですが、それを砧へ持っていく予定だったのです。それで、大体もう発表しかけたのですが、それは大変だといって、鋳物がだめなら、そういう放送産業とか、それに附随する関連産業が必ず出るから、それは、放送局がくるだけじゃだめなんだと。そういうのがくるといろんな会社がやってくる。もちろん大企業が来るのです。そうすれば、地場産業の、中小企業が、また下請でもいいから、仕事がきますから、そうすると、また産業が別な面で、よくなるのですよ。何も鋳物にかぎらないでいいのだから。そういうので、ちょうどあの当時、川口さんというNHKの会長に土屋知事さんと一緒に行って、川口市に何か持ってきてくれと言いました。そうしたら、よし、いっしょにやってやろうということになりました。ちょうどそのあと海老沢会長になりましたが、あの人があの頃は、まだ、副会長でそれでも力があったので、川口、海老沢正副会長に頼んで、とにかく川口の、せっかくあそこで、インキュベーターで産学官でもって一つの企業を興そうということで始めたのですから、地場産業にもできるだけ関わりのあるものをということだったのです。そういった何か絶えず関心を持って、そして、やっていこうというも

ので、それは必ずしも、今までは割合に予算からいったら成功した例が多かったですが、これからは厳しいし、岡村さんも一生懸命やってるのだけれども、あるいはどうしても財政の関係でできないものもあるわけで、だけど、やっぱりその方向へ向かうのは、大野さんといい、岡村さんといい、みんな歴代の首長は少なくともよかれと思ってやってることなのだから、それはやっぱりそういうことをやって、先人はそれぞれやってきたんだなということを、少しでもいいから理解してもらえれば、私は満足です。

○金井部会長

大分長くなったのですが、ちょっと私の方でもよろしいですか。

今回自治基本条例の検討ということですが、詩歌とか音頭とかだけでなく、例えば、今まで市民憲章とか、それから、そういう昔のものがあったのですが、昭和62年にまちづくり基本条例というのを作っているのですね。あまり、記憶にないようですが、あれはたいしたものでは、なかったということでしょうか。ただ、一応はホームページで見ると、何か市の基本的な条例はこれだというふうに、後生大事に掲げられてはいるのですが、あれはあまり記憶に残るような大したものじゃないんでしょうか。

○永瀬前市長

私自身の時代であまり記憶にないってことは、62年ですか。だから、あれは、これから鋳物がだんだんなくなっていく中で、町の整備をきちんとして、それで、62年ですと、そういうものをやろうという意気込みではないのでしょうか。基本条例というより、まちづくりをきちんとしたものにするという、それは覚えています。

○落合委員

乱開発防止が主目的で制定されたというようなものなのでしょうか。

○永瀬前市長

あのころは、建売住宅が乱立してきたので、きちんと区画整理をして、そして、やるのなら多少、高層化してもしょうがないよと、そういう基本をまとめるやつじゃなかったのでしょうか。精神的なものまでは、いってないと思います。

まちづくり条例みたいなものですよ、だから建物的な、都市計画的な

ものにウエートがあったと思います。

○落合委員

良好な環境の形成及び確保する施策を策定し、実施するということが川口市まちづくり基本条例に謳われていますね。

○野村総研（妹尾）

1点だけ、ちょっと話題が変わるのですが、ぜひ、前市長さんであったということ、職員さんの経験もあるということで、行政経営について少し伺いたいのですけれども、永瀬さんのときは、昭和63年前後に第1次の行革で3年間で7億円の削減をしたとかですね、そういうことを見たりしましたし、公債費比率だとか、経常収支比率なんか見ても、永瀬さんの時代は比較的下がっている、良好に近づいている時代だったというのが見てとれたんですけれども、うがった見方をすると、川口市というのは、東京都にも近いという立地条件で、そういった財政的なものに対して、全国的にだんだんバブルが崩壊して、厳しくなるのですが、危機感を比較的、得にくいというか、比較的のんびりしててもまあまあ大丈夫な立地条件があるというのが、うがった見方をすればですね、そういった中で、あるいは63年という、バブルの崩壊の前ですから、バブリーな頃に、そういったきちんと行革もやっていったという、その推進された原動力というか、意図というか、思いを少し聞かせてほしいのですが。

○永瀬前市長

そのころね、私は、川口の仕事ももちろんやっていましたけど、割合に全国市長会の何とか副会長までいったのです。けっこう全国市長会で横に座った市長さんとよく話したのですが、必ずそういう市長さんというのは、自分のところの財政が気になるのです。それから、ラスパイレス指数はどうだとか、それから、いろいろ係数でいってくるのですが、私は、あまり、シビアに見ていなかったのですが、帰ってくると、片一方じゃわいわいやっていながら、反面、財政部長にはもっと厳しくできないのかって言っていたのが影響したのかどうか知りませんが、そんなところでしょうね。各市に比べて川口市はいいなと、よくよその市長が言うのは、例えば、オートレース、ボートレース、それから、競輪もやってたのです。それで、オートレースは全国に6つしかないのですよね。今はどうか知りませんが、

6場の中では抜群に売り上げがよかったですね。それで、私はよくオートレースに行くと、市長にあいさつしろと言うのです。オートレースに遊びにきた人は、それこそ市民じゃない、住民が多いようだったが、だから、皆さんに頼むことは、オートレースに関心を持ってばんばん遊びに使ってくれと、深く考えれば福祉に影響するかもしれないけど、そんなことをここへ来て言ったってしょうがないから、「皆さん、きょうは記念レース大会だけど、ばんばん銭はたいて下さい。」って、それで終わりにしちゃうのです。そうすると、あいつは話がわかるよといって、一生懸命買った人もいるかもしれない。その頃の売り上げは、全部合計すると60億ぐらいだよ、一般会計に入れることができたのです。今じゃあもう夢のような話ですけど。それで、そのかわりオートレース場をやるのなら、宣伝をしなくてははいけない。それで、オートレースの宣伝だとか、それから、施設改善をしたり、それから電話投票にしたり、いろんなことをそのときそのときの流れの中でやってきました。総合的に今、考えるとそこまでやることはなかったのではないかといわれるかもしれないけれども、そのときはそのときで一生懸命ね、じゃんじゃん宣伝しろと。宣伝費なんかけちけちするなど、オートレースの会計ではですよ。それで、一般会計の方ではもう少しラスパイ減らした方がいいのではないかと。やっぱり財政については二重三重の考え方が必要なのです。そんなところです。

○金井部会長

それでは、大分もう時間を超過しておりますので、ここまでにしたいと思います。非常にいろいろと興味深いお話をいただきました。

どうもありがとうございました。